バカとテストと恐怖のクローン召喚獣

ミスターK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとテストと恐怖のクローン召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ６１３０Ｙ

【作者名】
ミスターＫ

【あらすじ】
こんにちわ、作者のミスターＫです。
突如文月学園に現れた恐ろしい偽者たち、誰が本物で誰が偽者か？
秩序の崩壊・・・飲み込まれた者たちの絶叫が文月学園に響き渡る。
行きつく先の結末は果たして希望か・・・それとも絶望か・・・
明久たちはこの事件の真実を目の当たりにする。

第０話　「バカとテストと恐怖のクローン予告」

２００２年１２月
人類を破滅と再生の道へと導く狂気の実験の企画書が提出された
その首謀者である男は一つのワクチンを完成させると忽然と姿を消した
この事件は一部の政府関係者しか知りえないことで事件は沈黙化を図った

２００８年２月
アメリカの小さな町イエスモナカで人々が一斉に消える事件が発生
しかしその一週間後に全員が何事もなかったかのように生活をしていた

２０１０年某日
日本の文月学園から某研究企業への報告
「研究施設に突然のイレギュラーな事態が発生。私たちはこの原因を至急解明中」
文月学園学園長の藤堂カヲルはイレギュラーの原因を解明したもののそれを対処することはできなかった。

そして２０１１年７月
一見してみれば何も変わらない文月学園
しかし終わりの始まりは刻々と近づいているものであった・・・
～誰か・・・助けて、このままではみんな・・・・～
吉井明久と坂本雄二、木下秀吉、ムッツリーニ、島田美波は夕方の暗くなっていく中近くの公園のベンチで座っていた。

オレ・・・見ちまったんだ。
姫路も翔子も工藤もＦクラスの奴らもみんな偽者
見た目は本物そっくりだけれど、中身は全部偽者なんだ！
俺たちの中にも・・・いるかもしれない。

偽者が！

周りから子供たちの狂気に満ちた笑い声が響く・・・
それは、平和な文月学園の日常で突如おこったあまりにも恐ろしい事件。
変わっていく人たち、それは狂ったような、普通のような、ひと時にはわからない。
だけど確実に壊れていく日常は彼らの目の前にも侵食していった。
誰か気づいてくれ！そして止めてくれ！そうしないと大変なことに！
校長室にあった手紙はすべての謎を解くためのカギとなるのか新たなる恐怖の扉なのか・・・
真実が分かったときに本当の恐怖が明久たちを襲う
このまま学園は恐怖と偽者に支配されてしまうのか！

人間どもよ覚悟しろ！！

「バカとテストと恐怖のクローン召喚獣」　こうご期待！

第1話　「クローン召喚獣」（前書き）

奇妙な足音とともに…自分そっくりの召喚獣が襲ってくる。
誰が仕組んだのか？何のために？目的は？
クローン召喚獣は自分のすぐ近くまで迫ってきた。
姫路、美波、秀吉、ムッツリーニ、雄二…本物は一体…
疑心暗鬼にとらわれた時、史上最恐の恐怖が文月学園に襲い掛かる。

…とはいうものの明久みたいなバカはそんなこと知ったこっちゃない。　バカはバカなりにこの事件を解決してくれる…はずないか…
…

第1話　「クローン召喚獣」

科学とオカルトと偶然によって開発された「試験召喚システム」を試験的に採用し、学力低下が嘆かれる昨今に新風を巻き起こした文月学園。
振り分け試験の成績で厳しくクラス分けされるこの学園で自信満々にテストの結果を受け取った男子高校生・吉井明久を待っていたのは、最低クラスであるFクラスの、学び舎とは思えない最低の教室だった。
期末試験まじかに迫った時、授業内容が何もわからない明久は同じクラスの姫路瑞希と一緒に図書室で勉強していた。

7月2日　現在時刻：5時24分
文月学園2階校舎内のトイレに一人の男が悲しみのあまり啜り泣きをしていた。
実はこの男は2年Fクラスの男なのだが実はこの男、同じ学年のAクラスの女生徒に告白して撃沈したのだ。

自分でも最大の賛辞を送って相手に告白ものの相手の返事は、

「無理。ごめんなさい、私頭の悪い男子・・・いや最低でも自分より頭がよくないと。だからじゃあね」

といってそのまま呆然としている男子を置いてどこかに行ってしまった。
男はそのまま数分間立ちつくしその後正気を取り戻しトイレに駆けこもって今現在に至る。

「畜生、畜生、畜生・・・なんでこうなるんだよ・・・吉井はモテ

るのに。許さない」

これからは異端者を処罰するＦＦ団としての活動に命をささげると心の誓ったその時。

トイレの個室が開きそこから綺麗でしなやかな腕が手招きするように男を呼んでいた。
ここは男子トイレなのだがその腕はまるで女のようだった。

（なんだあれ？もしかしてさっきの・・・！）

男子生徒は嘘だと思いながらも涙をぬぐいながらそのトイレに個室に向かい歩いて入っていった。

ギ～…ガチャン！！！

扉が閉まり数秒もしないうちにまた扉が開く。

そこから出てきたのは先ほどまで泣いていた男とは別人のような男が不敵な微笑みを浮かべながら出てきた。

丁度同時刻、二人の生徒が図書室で勉強している。

姫路「ここは？＝２を代入して方程式に代入するんですよ」
明久「へえ～そうなのか（さすが姫路さん、わかりやすいな）」
学園でも一、二を争うほどの姫路さんに教えてもらえばどんなバカでもある程度はわかるはず。

文月学園内の図書館は試験期間内のみ５時３０分まで開いているの

だがもう人は明久と瑞希しかいなかった。

放課後二人で勉強するなんて聞かれたら異端審問会やほかのクラスの奴らになにされるかわからないので二人で打ち合わせをした。

そしていったん学校を出たのち二人で図書室でおちあったというわけ。

明久としても3時30分に勉強を始めたのでここまでまじめに勉強したのは何か月ぶりだろう。

いつもまんがやゲームに没頭してしまうので・・・ダメな少年であった。

それに引き換え瑞希はこんな時間の勉強は朝飯前、明久相手に丁寧教えるほどの余裕があるのだから驚き。

「そういえば、この頃クラスのみんなやけに元気あるよね」

「えっ！そ、そうですか？」

実はその頃瑞希は明久と二人っきりで勉強してるとそのことばかり考えていたので変な奇声をあげてしまった。

「？？？」

「私はそうはみえませんが・・・でもそうだとすると期末試験後の試験召喚戦争があるからでしょうか？」

「やっぱり！今度こそはAクラスに勝たないとね」

「じゃあそのためにもいっぱい勉強しないとですね」

「やっぱり・・・勉強しないと点数は取れないか。でも雄二が霧島さんとこの頃なにか怪しげなこと話してたのを見たな」

「フフフ、やっぱり霧島さんと坂本君は仲がいいんですね」

「そうかな（雄二があれは敵を安心させて楽に試験召喚戦争を行う罠だって言ってたけど）」

それは言わないでおこうと明久は思った。

「そうだ明久君。試験が終わったらどこか遊びに行きませんか？」

（えっ？それってもしかしてデート？）

その時、後ろの扉から一人の少女が入ってきた。

制服の上からもわかる豊満な胸に、育ちのよさそうな背格好、さらにピンクの髪。

誰かに似ているような気がしてならない人、それは・・・

だけれど明久たちが座っている机からかなり離れていたので二人が気付かない。

「じゃあ試験が終わった日にプールにいきましょう。その温水プールのチケットが手に入ったので」

プール、プール、プール！！！！！！

明久の頭の中に瑞希の水着姿が思い浮かんで脳内が爆発してしまう。

「でもなんで試験なんか、勉強なんかあるんだろう」

「やっぱりそれは将来、社会に出て役に立つためなのではないですか？」

「僕がこの学園の学園長だったらまず試験は廃止するよ。そして豊かな行政改革を実施するんだ」

「それってどんなのですか？」

「たとえば食券は全部無料で、図書室には漫画、教室にはゲーム機が勢ぞろい・・・いいなぁ」

すると立ち上がって何やらうかれたように踊りだす明久。
それは行政改革ではなく自分の趣味の押しつけである。

それを見たひとりの生徒が明久に一つの飴を差し出す。

「はい、陽気なのは結構だけれどもっとがんばってね。もうすぐなんだから」

「もうすぐ？（テストのことかな？）」

すると生徒はそそくさと図書室を後にした。

『５時３０分になりました。校内に残っている生徒は速やかに下校してください、繰り返します、５時３０分になりました・・・』

ちょうどいいところだったのに下校のアナウンスが入ってしまった。
仕方なく荷物を整理して図書室を出て学校の校門前に向かう、明久

と瑞希。

「じゃあ僕は買い物があって右に行くから、姫路さんは左だっけ？」
「そうです。ではまた明日」
「じゃあね」

たわいもない挨拶をすると二人は別々の方向に歩いていく。

【　姫路瑞希　目線　】

あたりもすっかり暗くなり周りにも人は誰もいない。
期末試験が終わった後、明久と一緒にプールで遊びに行くことを思い浮かぶと自然と笑みが出てしまう。

（楽しみだなあ）

靴の音をなびかせ歩いていると唐突に後ろから、靴の音が二重になって聞こえてくる。

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカ・・・

（あれ？もしかして明久君？）

ちょっとの期待をのぞかして後ろを見てみたがそこには誰もいなかった。
ではさっきの足音は誰だったのだろうか。

後ろの踏切警報機が鳴り響く。

周りがほとんどいないのでその音は瑞希の耳によくなっている。

（いそがなきゃ）

遮断機が下りる前に急いで走って踏切を渡るがそのさいに大きな胸が邪魔になるような気もした。

遮断機が下りると後ろを電車が通る。

やっぱりさっきのは気のせいだったのだろうかとまた元の道を帰ろうと振り返ったその時！

み～つけた・・・・・・姫路さん・・・・

目の前にいたのは自分とそっくりの人間、もう一人の姫路瑞希だった。

その瞬間、もう一人の自分に強引に腕をつかまれどこかに引きずられようとする。

「た、助けて・・・」

しかし電車の通る音でその声はかき消されてしまう上に電車の窓が真っ赤に染まっているように見えた。

電車が通る間、瑞希の絶叫が街に響き渡った・・・・・・

第1話　「クローン召喚獣」（後書き）

第一章を書き終わりました。
これから頑張っていこうと思います。

今回は瑞希がそっくりさんにつかまってしまうところまで書きました。
どうでしたでしょうか？
ある程度読んでからでも構わないので感想をお願いします。
これから日常をどんどん浸食されていく明久たちを書いていきます。
不束な小説ですがどうぞ支援よろしくお願いいたします。

第2話　「非日常」（前書き）

無事に第1話が書き終わり第2話に突入です。

瑞希が事件に巻き込まれた翌日から物語が始まります。

実はこのそっくりさんの異変にいち早く気付くものが・・・一人・・・

今回は全編会話パートにするつもりです。

第2話　「非日常」

7月3日　現在時刻：7時21分

明久はこの日、いつもの通り（？）姉の吉井玲によるキスのおはようがおこなわれようとした。
しかし直前で気づきベットから飛び降りることで難を逃れることができた。
玲はすごく残念そうな顔をしていたが、明久は安心していた。
もしこれ以上、顔がが明久の近くにあればもう逃れられない。
ひどければ童貞を奪われ、それでなくても折檻は免れない。
本当によかった・・・

「アキ君。お姉さんのことを愛していないのですか？」
「いやそうじゃなくてさ～」
「それはそうと、今度女の子と遊びに行くんですね。プールに・・・」
（なぜそのことを！！）
この瞬間、吉井明久は窮地に立たされることになる。
「なんのことかな～、知らないな～」
無駄だと思うが一応しらを切ってみる。

（まずい…姉さんは僕が女の子と仲良くすることを禁止している。もしも、もしも、もしも姫路さんとプールに行くなんてわかったらなにをされるか！）

「行くんですね？」

「ひ、ひ、ひ、明久のヒ・ミ・ツ♪」

可愛くいってみたが目の前の玲はなにやらブラックなオーラを醸し出していた。

「歯を食いしばってくださいね」

「ごめんなさい！」

一応土下座して謝ってみた。許してもらえるとは思えないけれど。

「人間いつ、どのときでも過ちは犯すものです・・・ですから姉さんが熱いキスをしてあげましょう」

そういうと玲は明久を肩からつかみ唇を迫ってくる。

「その流れおかしい。まって、謝るから！ストップ、ストップ、ストップ！」

死ぬ思いでキスを逃れることができた。しかし災難が終わったわけではない。

「アキ君はそこまで姉さんのことが嫌いなんですね」

「ごめん・・・でもやっぱり兄弟でそんなことするなんて・・・」

「ムラムラしますよね？」

「変態だ～！ここに変態がいる～」

「本気にしないでください。３割は冗談ですので」

「やばい危険だ。と言う事は７割、つまり半分以上本気で接している」

（なんでこんなことに～！はっ！もしかしてこの姉さんは偽者で僕を陥れようと・・）

「そんなことあり得ませんよ。姉さんはいつでも本物です」

心を読まれたことに明久の頭の中はオーバーヒート寸前であった。

「それにアキ君が本物だったら誤魔化そうとしたのですか？一緒に遊びに行くのが女の子でなければアキ君は正真正銘の本物ですよ」

「じゃあ偽物だという証拠は？」

「アキ君を無理やり女装させた時に嫌がればまたは私とキスをしなければ・・・偽物ですよ」

なんでそんなことで偽物か本物かを見分けられなければならないのか・・・そもそも僕は正真正銘の本物だ！

「しかたないですね。ただし不純異性行為と認められてしまったときは」

「ときは？」

「一族全員皆殺しです♪」

「それは姉さんも死んでいるから」

・・・と言う事があったとやつれきった明久は雄二に説明している。
雄二には珍しく最初から最後まで話を真剣に聞いてくれた。
それはおそらく雄二もよく霧島さんに同じようなことをされているからであろう。
どんなことをされているかは皆様のご想像にお任せしますが・・・

「明久。お前も大変なんだな・・・」

「雄二・・・」

見つめあう二人。

「お主ら、何をやっておるんじゃ？」

後ろを振り向くとそこには木下秀吉とムッツリーニこと土屋康太そして島田美波がそこにいた。

「あんたちやっぱりそういう趣味があるのね」

「・・・ボーイズラブには興味ない」

淡々というムッツリーニになんだか涙目で哀しそうに言う美波。

「「違う！！！」」

二人は今日一番（まだ朝だが）一番の声で言った。

「冗談よ」

「・・・冗談」

「わしは冗談に見えなかったが」

「「早く行こうぜ」」

強引に話を終わらせて学校への道のりを先にする明久御一行様。

それからはなんとなくたわいもない話で楽しむ。やっぱり平和が一番と明久は思った。

とその時、雄二が何かを思い出したようにため息をつく。

「おい雄二。ため息なんて雄二らしくないな」

「そうね、いつもの坂本じゃないわね」

「そうじゃな、何か悩みでもあるのか？」

「・・・恋の悩み」

「「「ないない」」」

三人で一斉にムッツリーニに突っ込みをする。

「そういえば昨日も元気がなかったような」

「どうせ霧島さんのことでしょ」

「なるほどじゃな」

そういうとなぜかみんな思い当たる節がいくつもある。

霧島さんの雄二好きはたまに常軌を逸したものがあるから。

ある時は手錠で、ある時は睡眠薬で、ある時は監禁されて・・・ここまでくれば立派な犯罪である。

でもそれぐらいならばほぼ毎日のことだから今更ため息をつくほどのことじゃないのに。

「そうじゃないんだ！」

「じゃあなんなんだよ」

「翔子がこの頃なんか変なんだよ」

だからあまり言っては失礼だが霧島さんが雄二に対して変なのは今に始まったことじゃない気がする。

「翔子が最近俺に優しんだ」

は？

どういうこと？

「それが翔子のやつ俺が女子のことと見たりしても浮気とか言わなくなったし、なにより俺の思ったこと何でもやってくれるんだ」

（いいじゃないか！結構じゃないか！理解してくれるなら）

「それが何か問題でもあるのか、坂本よ」

「いや・・・それは、その・・・根本的な問題だ！」

なんじゃそりゃと全員が一致して思った。

「でも信じられないな、そんな霧島さんがねえ」

「じゃあ見せてやるよ証拠を」

すると雄二は大声で「お～い、翔子～」と叫んだ。するとどこから聞いていたのか霧島さんが勢いよく飛んできた。

「・・・雄二。おはよう、どうしたの？」

可愛い目でいつもとは思えない霧島さんが雄二の手を握った。

ブッシュー！

ムッツリーニは鼻血が出たのかティッシュを鼻に詰めていた。

「ちょっと呼んでみただけだから、もう言っていい。またあとでな」

「・・・はい。じゃあまたあとで」

「会長。早く行こうよ～」

走って行った先には工藤さんが笑顔で勢いよく手を振っていた。おそらくあそこにいたのだろうか。

一同は何のことかわからず唖然としてしまう。

「なんなんだろういったい」

「ほらな変だろう」

「た、確かに・・・」

「俺わかるんだ。長年一緒にいたからわかるんだ、あの翔子は、あの翔子は・・・」

本物じゃない！

朝なのに明久、雄二、秀吉、美波、ムッツリーニ五人の周りには冷たい風が吹き荒れる。

この一言がこれから訪れる恐怖のカギとなるとはだれも思わなかった。

第2話　「非日常」（後書き）

第2話「非日常」
みんなの日常とともに一人の少年の非日常の幕開けを書いてみました。

次はもう一人から語られる恐ろしい都市伝説を。

まだまだ話は序曲。楽しんでいってください

第3話　「序幕の幕開け　～文月学園都市伝説～」（前書き）

世の中には実に多くの噂があふれています。
それらは「口裂け女」など全国が知っている噂から地域でしか知らない小さな噂。
学校などでは七不思議などというのがあるのではないでしょうか？
しかしどんな噂でも出所というものがあり火のない所には煙は立たぬというように必ずしも全てが信用できないというものではないのです。
ですから噂を聞くときはそのことを考え慎重にしたほうが自分のためですよ。

第3話　「序幕の幕開け　～文月学園都市伝説～」

本物じゃない！

雄二のあまりにも衝撃的でなおかつ普通の人には到底理解できない発言に一同は言葉を失う。
そもそも本物じゃないというのはいったいどういう事なのか？
じゃああれはいったい誰？
霧島翔子・・・はっきり言ってそれは彼女を知っている人であれば誰でもわかる。
それを性格が少し変になったぐらいで「本物じゃない」といわれればどう対処していいかわからない。
それに変というのはいったい何を基準として考えているのであろう？
明久は怒りを通り越して呆れに入っていた。
バカなのに・・・

「関係ないよね！バカなのは！」
「明久、おまえは誰に向かって怒ってるんだ？」

「いやその・・・っていうか本物じゃないってどういうこと？」

「本物じゃないってことは、本物じゃないってことはつまり偽者ってことか？」

偽者だとは先ほど以上に大胆かつ奇抜な発言であった。

「分かんないが、本物そっくりでも本物じゃないんだ。それで翔子が偽者だってことに誰も気づかないんだ」

「ということは気付いたのは坂本、お主だけだと言う事か？」
鋭い指摘をよこから繰り出すのは文月学園随一の男の娘である木下秀吉。
あくの強いバカばっかりのＦクラスで数少ない常識人といえるべき人物だ。
しかし彼はれっきとした男なのでやはりそういう点ではＦクラスなのだろうかと思う。
「ま、そういうことになるかな」
顔を赤めて恥ずかしそうになおかつ自分に対しての優越感を感じる顔をする雄二。
「・・・そういう噂を知ってる」
ムッツリーニがヌッと雄二と明久の目の前に現れ、二人は驚きのあまり声も出なかった。
「びっくりした～」
「土屋、それってどういう噂なの？」
怖いモノ嫌いの美波が何やら積極的にムッツリーニに噂のことを聞いてくる。
この前の肝試しの時は大変だったなと３秒間の想い出に浸る明久であった。
「・・・これは文月学園の話

遊んでるか、勉強してるかで暗くなり家に帰ろうと校門を出て一通りのないところを歩いていると、

ヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタ・・・」

ムッツリーニが怖い雰囲気を出すためなのかゆっくりと４人の周りを歩く。

周りには紫のブラックなオーラが流れ出す。

「・・・振り返っても誰もいないけれどまた歩き出すと、

ヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタ・・・・・・・・・・・・・

ギャア！！！」

大声で手を挙げて叫ぶムッツリーニ。

「・・・って突然目の前に自分のそっくりの偽者が現れる」

「うそやだ、怖い」

「そ、それでどうなるのじゃ？」

「そうだぞ」

ただいまと家に帰るのは本物ではなく偽者のほうらしい。

そして本物は二度と家には戻ってこない。

「バカバカしいな、さっきはあんなこと言ったけれどいるわけないじゃないか、そんな自分そっくりの偽者なんて」

雄二がなぜか冷や汗を流しながらムッツリーニに言った。

確かにムッツリーニの話かたは明久でも少し引いてしまうほど怖かった。

朝なのに五人の周りには夜のような雰囲気になってしまった。

「そりゃ、まあね」

「だいたいムッツリーニは誰から聞いたんじゃ？その噂は？」

秀吉がムッツリーニに噂の出所を聞く。

「・・・よくわからない、ムッツリーニ商会の噂情報網から。人呼んで・・・

『文月学園都市伝説』」

「でも土屋、それって根も葉もない噂ってやつじゃない？」

「あっ！美波が恐がってる。ぺったんこな胸の割・・・ギャアアアアアッ～」

余計なことを言った明久は美波に凄まじい関節技を受けてそのまま動かなくなった。

「まあ翔子は気紛れだからな、すぐに元に戻るとは思うが」

「ねえねえ、偽者って本物を食べるのかな」

「・・・わからない、でもとにかくいなくなる」

都市伝説とは得てしてそんなものだ。怖がらせる要素はあってもその核なる部分は存在しない。

口裂け女、くねくね、トイレの花子さん、その他さまざまな都市伝説みなそうだ。
そう考えるとこの文月学園都市伝説もその類に入るだろう。
「でも、でも、もしも姫路さんや霧島さんや工藤さんやほかのみんな・・・僕以外の人がみんな偽者だったらどうしよう」
暗いムードになっているその時後ろから光となる存在が現れた。
「おはようございます、明久君」
それはFクラスの清涼剤ともいえる人物、姫路瑞希さんその人であった。
どんなに悲惨な状況下でも彼女が現れれば空気が清掃されてしまう、裏を返せば彼女がいなければ悲惨な状況がさらに悲惨な状況になってしまう。
「大袈裟じゃないの？」
「だから明久は誰に話しているんだ？」
「えっ？」
「みなさんどうしたんですか？なんか空気が重そうでしたけれど」
やはり姫路さんはこの状況下を察知してくれたのだろうか？
頭のいい人は空気までも上手に読むことができると明久は思った。
「いやそれがね雄二が・・・」

～明久が先ほどの流れを説明中～

「そうなんですか、みなさんはどう思いますか？」

「えっ？僕は・・・秀吉はどう思う？」

「わしは・・・坂本はどう思う？」

「俺は・・・島田はどう思う？」

「私は・・・瑞希はどう思う？」

「私はですね・・・」

「「「「ループしてるし！！！」」」」

明久、坂本、秀吉、美波はいっせいに突っ込みをする。

「偽者でもみなさんでしたら優しい偽者でと思いますよ」

あまりのまぶしさに四人は目をくらます。

太陽の光なのかそれとも瑞希さんの光なのかわからないがそのまぶしさは１００カラットはあった。

しかし優しい偽者とはいったいなんだろうか？

「明久君、急ぎましょ」

すると瑞希は明久の手を握ってそのまま歩き出す。

「ちょ、ちょっと姫路さん」

「瑞希いいい！」

明久と美波は目を丸くして驚く。

「早くしないと遅れてしまいますよ、さあ明久君それに皆さんも」
「ちょっとまって！」
美波も明久の手を握って明久たちは学校へと去って行った。
残った三人は呆然としてしまう。

「どうするこれ？」
「・・・残りは当局に任せる」
「当局とはなんじゃ？」
「分からないか秀吉。この状況下を見たＦＦＦ団が」
「あっ、まさか」
「・・・そうあいつは絶対に処刑されてしまう」
「だから俺たちはあえて止めなかったんだ」
「・・・異端審問会は人の幸せ、特に女に絡んだ男に幸せは許さない」
「お主らというやつは」
呆れる秀吉を連れて三人は明久の後を一定の間隔を置きながらついてゆく。
だが学校についた三人は驚愕のものを目にすることになる。
美波と瑞希が両端についた明久が教室に入る。
その瞬間想像を絶する惨劇がＦクラスに繰り広げられる
・・・はずだった。
「よお吉井、おはよう」

「姫路さんに島田さんもおはよう、一時間目は体育だって」
「おれたちもう着替えたから急がないと鉄人に怒られるぜ」
「手なんか繋いじゃって。早く着替えろよ」
入る寸前惨劇が頭に浮かんだ明久とはなっから惨劇を思い浮かべていた三人は何がなんだからわからなかった。
「これはいったいどういうことだ？」
「・・・俺にもさっぱりわからない」
「わしもこの状況は理解することができぬ」
Fクラスの奴らは全員一斉に教室を出て行った。
「じゃ、じゃああたしたちも更衣室に行くね」
「ではあとで明久君」
「ではわしもいくとするかの」
女性人二人は女子更衣室に秀吉は秀吉専用更衣室にいく。
三人もいつまでも呆然としているわけにもいかず着替え始めた。
ムッツリーニは迅速の速さで着替えて先に行ってしまった。
「異端審問会の奴ら一体どうしたんだろうな？」
「僕にもわかんない、はっきり言って殺されるかと思った」
着替え終えた二人が体育館に行こうとすると教室内の空いた窓の近くに姫路さんがいた。
「明久君一緒に行きましょう」

「う、うん」

（やっぱりあんなアグレッシブな姫路を見たのは初めてだ・・・一体どういう・・・はっ！）

雄二の脳内に先ほどのムッツリーニが語った文月学園都市伝説が頭に浮かぶ。

≪本物は消えてしまう≫

「そんなはずない、まったく別人とかそっくりさんとかって付き合ってらんないって」

「なんか姫路さんずいぶん積極的だね。まるで昨日と別人って感じ」

（別人？）

明久の言った『別人』という言葉に反応する。

「昨日と変わりませんよ」

瑞希は笑顔で否定した。

（ふん、バカバカしいな偽者だなんて）

「先行ってるぞ」

雄二は明久を置いて体育館へと走って行った。

空いた窓から雄二が向こうに向かっていったのを確認した瑞希は突然窓を閉める。
その窓は一瞬だけ赤く染まったように見えた。

「それで明久君にちょっとお話ししたいことが・・・あるんですけれど。できたら放課後、教室で」

不敵な微笑みを見せた瑞希に明久は「はい」と答えることしかできなかった。

第４話　「置き手紙の謎」（前書き）

快適なはずの学校生活。
でも孤独になりがちなあなたにとって友達は大切なパートナーといえるでしょう。
しかし私立中学や高校ではほとんどの場合、規則や生活ルールが決められており自分の思うようにならないのが現状のようです。
そのルール…あなたは守れますか？

第４話　「置き手紙の謎」

明久と姫路は二人きりで行こうとしたら美波が後ろからものすごい勢いでとび蹴りしてきた。
その顔はとてもじゃないけれど直視できないぐらい鬼の形相していた。
だけれどはたから見れば笑顔の鬼の形相なので一層恐怖が増す。
当の明久はなぜ自分が蹴られたの分からず走馬灯が頭によぎる。
～楽しかったな・・・僕の十数年間、さらばだお母さん・・・僕を生んでくれてありがとう
ムッツリーニの写真をもっと買いたかったし秀吉の女装も見たかったし姫路さんと一緒のプールそして雄二・・・あいつのことはいいや　　さようなら～
と天に召される寸前にまた関節技を食らわせられ現実に戻る。

「アキ・・・あんたいったい何してるの！？」
「いや僕は何にも」
「瑞希は包丁を5本ほど持ってきてくれる、その包丁で楽しいことするから」
「包丁ですか？わかりました」
「お願いひマフ、たじげてくだしい！」
「まったく、仕方ないわね。アキの許しに免じて包丁二本で許してア・ゲ・ル♪」

「いやいや『ア・ゲ・ル♪』じゃなくて包丁って一本でも刺さったら致命傷って知ってるよね？
というか姫路さんも止めてよ！」

しかし瑞希はなぜかニコニコと見ているだけで止めようとはしなかった。

その時突如授業開始1分前の予鈴チャイムが鳴った。

そうなると美波も関節技を中断して瑞希とともに体育館へと猛スピードで走って行った。
取り残された明久は動くことができずそのまま一分がたち授業が始まってしまった。
一時間目の体育は補習授業担当の鉄人が受け持っているので遅れるわけにはいかないのだ。

よって明久はボロボロの体を動かして体育館に向かったがもうすでに手遅れであった。

～文月学園　体育館～
「吉井！俺の授業に遅れるとはいい度胸だな」
「いや僕の話を聞いてください。今回遅れたのにはちゃんとした理由があるんです」
「なんだ聞いてやるから言ってみろ」

「倒れてました」

確かに本当に明久は倒れていたがそんなことが通用するはずもなく。

「そんなこと信用できるか！」
「え～」
「まあいい。はやく列に並べ」
あれ？今回は意外と怒られなかった・・・僕の誠意が認められたのかな。
おそらくそんなはずないがさほど怒られなかったことに喜びを感じながら列に並ぶ。
「今日は体育だが予定を変更して試験召喚獣での体育とする。まずは須川と佐藤から」
「「はい！」」
鉄人に一番に呼ばれただけなのにあの二人は大声で「はい」といった。
先ほどもそうだったがなにか嬉しいことでもあったのだろうか？
残った連中は各々座ったりして談笑して鉄人に呼ばれるのを待っていた。
「朝からついていないよな」
「まったくだな、特に明久は」
「そういえば昨日も変える寸前に持ち物検査というふざけた検査があったよな」

それは先日皆が帰る寸前のＨＲ（ホームルームの略）のことだった。

～回想開始～

「全員そこを動くな！鞄を机の上において中身が見えるようにして出せ！」

まずかった、その日明久は特に授業に関係のないもの　いや　授業に関係のないものしか持ってきてはいなかった。

次々と持ち物を没収される哀れな生徒たち。

抵抗するものは容赦ない制裁され、泣きわめく者までいた。

「授業に関係のないものは一か月間俺の自宅で没収だ」

白い袋にどんどん詰めていく鉄人の姿はまるで逆サンタクロースのようだった。

そしてついに魔の手は明久のところまで来る。

「吉井、貴様は制服も靴下もすべて脱げ」

「な、何でですか？雄二でさえポケットだけでよかったのに（それでウォークマンをとられたけれど）」

「ダメだお前はズボンの中にすら何かを隠し持っているからな。現にほら一年前の持ち物検査の時はそれでＤＳが出てきたぞ」

「よく覚えていらっしゃるお方」

「お前のバカっぷりは忘れたくとも忘れないんだよ。わかったら早く服を脱げ」

「いや～犯されるう～」

結局明久はゲームソフト、漫画、音楽プレーヤー、その他もろもろ

限りなく出てきた。

因みに一年前より没収される量が増えてる。

「僕の、僕の、僕の愛すべき子供たちが～」

～回想終了～

「よりによって先月買ったウォークマンの最新型が没収されるとは」

雄二は悔しくて歯をギリギリ鳴らす。

「僕はおそらく今回の没収だけで総額４万は超えてるよ」

「次、姫路と木下は前に出なさい」

鉄人に呼ばれて秀吉と瑞希が前に出がなぜかこの時だけ男子からは歓声が上がった。

「お、姫路さんだ。ムッツリーニはせっかくの体操着姿を写真に収めなくてもいいの？」

「・・・デジカメはすでに没収済み」

体育なんてそう何回もあるわけではないし木下＆瑞希のダブルショットはめったにお目にかかれない。

それを逃したムッツリーニは本当に悔しそうであった。

「そういえば昨日の持ち物検査って校長が提案したものなんだってね」

「なに？そうなのか・・・」
「そうらしい」
「そうか、それならやることは一つ」
「そうだね」
「「復讐だ」」

なぜかダンディーな雰囲気を流した二人はこんなくだらない検査を提案した校長への復讐を誓った。

「次、吉井と島田は前に出なさい」

「それじゃあ行ってくる」
「おう、お前は今じゃ観察処分者だもんな。召喚獣の扱いは慣れてるだろ」
「あのね一応言っておくけれど僕は雄二と違って『問題児』ではないからね」

（観察処分者だって・・・失礼な。しかし文月学園開校以来一度も出ていないバカの代名詞が僕にあたってしまうだなんて）

「吉井！！！早くしろ！」
「はっ、はい」

怒鳴られて目の前の空いているところに立つと美波が哀しそうな顔で立っていた。

（どうしたんだろう、優しい言葉でもかけてあげようかな）

「どうしたの？自分の召喚獣があまりにも貧弱でショックした？」

だが明久の顔を見た瞬間に美波の顔は一気に笑顔をとり戻した。
「あっそうかアキが相手だったんだ嬉しい」
やれやれみんなの前で困ったものだと明久は自分に酔いしれる。
「アキを殴るのってすごく気持ちいいもんね」
本当に困ったものだ。
「美波ったら、なぐり合うのは召喚獣だよ？僕らじゃないって」
「わかってるけどアキは間違ってる」
「なにが？」
「殴り合うんじゃなくて、私が一方的にアキを殴るだけだから」
（全然分かっていない！）
「あの鉄・・・いや西村先生。これは校内暴力宣言ですよ。僕らの持ち物検査よりこういう苛めをなんとかしないと」
「そうだな、島田」
「はい」
「今回だけ特別だぞ」
「はいっ！頑張ります！」

「その会話おかしくない？」

「しかし先生も美波もバカだな～。僕がそう簡単にやられて許しを請うとでも？逆に返り討ち・・・」

台詞をまだ言い終わっていないが美波に顔をつかまれてそのまま引きずられる明久。

その時間、一人の男の想像を絶する悲鳴と誰かを一方的に殴り殺すような音が体育館に響き渡った。

明久は苦しみのあまり許しを請うが許してもらうことはなかった。

昼休みに明久と雄二は教師の目を潜り抜けながら校長室へと侵入した。

二人はその前にどこからか仕入れた鍵１５０個を持っている。

学園長室のすべての机の引き出しに鍵をつけて『どれかが当たり、頑張ってね？』という張り紙とともに偽の鍵１５０個とそれぞれ違う鍵穴と混ぜて机の上に置いた。

雄二が見張りをして明久が実行係。

「終わったよ」

「よし、じゃあ撤収するぞ」

明久がそそくさと校長室を後にしようとすると一枚の紙が落ちた。

それは紙というより手紙みたいだ。

表面には『これを見たものへ』と書かれていた。
「なんだろうこれ？差出人は不明だよねえ。ってこれを見たものへって僕のこと？」
確かに人の名前を書いていない以上、これを最初に見た明久宛の手紙といっても過言ではないと思われる。
手紙をまじまじと見ていると急に雄二が校長室に入ってきた。
「鉄人が来た！逃げるぞ！」
「わ、わかった」
明久はとっさに手紙をポケットの中に入れて校長室から教室へと猛スピードで走って行った。
教室では瑞希と美波とムッツリーニと秀吉が楽しそうに談笑している。
「どうしたの？」
「あっ、明久。どこ行っていたのじゃ？」
秀吉が質問するがさすがに校長室に行って復讐していただなんて口が裂けても言えない。
「ちょっと勉強に」
「嘘じゃな？」
「なんでわかったの？」

当たり前である。明久が昼休みに勉強するだなんてありえないしもしいたとすればそれは・・・
その時瑞希が何か思いついたような顔をした。

「そうだ、みなさん今日家に来ませんか？」
「えっ？」

「今日はお父さんもお母さんもいないし、おいしいお菓子があるんです。それに試験勉強を兼ねて」

お菓子という言葉に明久は反応する。
普段お腹を空かせている明久（この頃は玲によって少しは空腹時間が減っている）にとって食べ物が斑得るチャンスを逃す手はない。

しかしそれでなくても瑞希の誘いを断る理由はない。

「僕はいくけれど、みんなは？」
「わしはいくぞい」
「あたしも行くわよ」
「・・・行く」
「俺もいってもいいぜ」

「じゃあ皆さんでいらしてください」

と言うことで明久を含めた5人で瑞希の家に行くことにした。

（いらしてくださいね・・・楽しみです　　本当に楽しみ　　）

第5話　「カラスがなく頃に」（前書き）

人間には二種類あります。
現実を突き付けられたときにそれを受け入れる人とそんなはずはないと反発する人です。
では彼らの場合は？

第5話　「カラスがなく頃に」

７月３日　現在時刻：１５時３２分

帰りのＨＲのち鉄人に呼び出された明久＆雄二。

二人は何のことかわからないような顔をしていたが校長室の件だと言う事はすぐに頭によぎった。

鍵を１５０個も付けるようなイタズラはあの二人しか、しないからと本人たちもわかっている。

だけど呼び出し理由は予想とはずいぶん違った。

坂本はクラス代表としての仕事、明久は観察処分者としての仕事。

鍵の件はまったく問われることはなかった。

嬉しいような不思議なような、明久は姫路たちに先に行くように伝えて鉄人のところに行った。

仕事が終わって教室の戻る明久。

赤と黒のコントラストが窓覆っている。

「やっと終わったよ～。鍵のこと言われなかったのは良かったけれど鉄人のやつコキ使いすぎ」

先ほどは鉄人にあれやれこれやれと言われ続けられたので瑞希の家に行く前にくたくたの明久であった。

この後勉強しに行くだなんてこれはある意味拷問だ。

（そういえば姫路さんが放課後に教室でって言ってたけれど何だろう？）

今日になっていつもと違う雰囲気を出している瑞希の言いたいことをいろいろ想像する。

といってもバカの明久に相手の考えていることを考えるのは容易ではない。

一人になった教室で明久が帰る支度をしているとポケットの中に何かが入っていた。

（なんだろうこれ？お菓子かな）

ポケットから出したものを見てみるとそれは昼休みに校長室から持ち出した『これを見たものへ』という手紙であった。

中を見ようとすると雄二が入ってきてまたとっさにポケットに拾う。

「よお明久、何やってるんだ？」

「いや、雄二こそそんなところで何やってるの？」

「おれは普通にクラス代表としての集まりがあったんだ。まあ俺は参加しないでほとんどは翔子が仕切っていたけれどな」

「ふ～ん。あっ、そういえば霧島さんの様子はどうなの？まだ雄二の言うおかしいってやつ」

「いやあの時は普通のいつも通りの翔子だったけれど、やっぱり時たま俺に対して笑顔で手を振ってくるところが・・・」

明久が雄二の腹をグーでパンチする。

「いってええ！何するんだよ明久」

「雄二の痛さより、僕の心の痛さのほうがはるかにい大きい」

「何言ってるんだお前？まあいいや、じゃあ俺は先に行ってるから。あとでな」

雄二も教室から出て行ったところで早速、手紙を読んでみることにする。

しかし、手紙を開けてみると思った以上の長い文章は書いていなかった。

『～これを見たものへ～

この手紙を見たものがいた場合そのときはまだ間に合う。

この手紙を見たものがいた場合手遅れになる前にはやく対処を。

もうタイムリミットは刻々と近づいている。残りは一週間かそこらだと思う。

奴らは表面は陽気でノリがよく優しいがそんなのは作り物、気を許したら最期。

奴らに直接なる弱点はない。

しかし呼びかければ必ず振り返る、そして何より首元に＊＊＊がある。

入り口は屋上の倉庫の中にある。

だれか奴らを止めてくれ、そして騙されるな、奴らは』

そこで手紙の書きとりが終わっている。

首元にの部分は破れていて何が書いてあるかは残念ながらわからなかった。

首元になにがあるんだ？そしてなんだ奴らとは？
明久はとんでもないものを見てしまったような気がした。
「なんだよ奴らって・・・・もしかして偽・・・はっ！」
目の前にただならぬ気配を感じて見てみるとドアの向こう側に笑顔を浮かべた瑞希がたっていた。
その笑顔は今日一番の美しい笑顔だったがその時はなにやら得体のしれない恐怖があった。
「あ！明久君たちココにいたんですか探しましたよ？」
「ひ、姫路さん」
すると瑞希は笑顔のままドアを開けて教室の中に入ってきて明久に近づいてくる。
「それより明久君は今何を見ていたんですか？」
「っえ？それは、その・・・テストだよ」
「ウソですよね？」
「え！？」
「それにこの頃みんなの様子がおかしいって言っていましたけれど何がおかしいんですか？」

「いや、その・・・なんか・・・霧島さんが」

「『霧島さんが』だけです？他にも何かあるんじゃないですか」

笑顔で首を横に曲げるがそれはほぼ直角に曲がっているといってもよかった。

目の前にいた瑞希は腕を大きく回すと明久の肩をものすごい力でつかむ。

「さあ私に話してみてください。いったい何を見たのか・・・」

「姫路さん・・・僕は」

その時、雄二が奥の扉を開けた。

「やっぱい、やっぱい。忘れ物しちまった」

雄二の存在を確認すると瑞希は悔しそう「チッ」と舌打ちをした。

「あっ、姫路と明久じゃね～か。二人で何やってるんだ？」

「いや、なんでもないんですよ。そうだ私先生に頼まれたことを思い出したのでちょっと行きますね。皆さんが来るころには帰れると思いますよ」

手を明久の肩から話した瑞希は笑顔でそう答えた。

「じゃあ、またあとでね明久君」

そう明久に耳打ちをすると瑞希はバックを持って教室を後にした。

「明久、姫路と何やってたんだ？あまり変なことやってると異端審問会の奴らに惨殺されるぞ」

「そんなんじゃない、そんなんじゃないんだ」

明久の顔はいつものバカたっぷりの顔ではなく汗を流した非常に強張った顔をしていた。

雄二はそんな明久の表情の変化には気付かなかった。

そんなはずない、そんなはずないと明久は思いたかった。

いや思いたくないというより瑞希を信じたいという気持ちのほうが強かったと思われる。

自分を含めすべての人が偽者かもしれないがそんなのはただの都市伝説。

瑞希の様子がおかしいのは気のせいだと思いたいし、そうだとしても偽者だとは絶対に思いたくない。

明久は短い間にいくつもの苦悩に襲われるが・・・

「明久、大丈夫か？なんかおかしいぞ」

「えっ？大丈夫だよ」

「偽者なんているわけないよな、俺も信じたい」

「雄二・・・そうだよ偽者なんかいるわけない。みんな本物だよ。帰ろう」

「おう！」

二人で校門に向かうとそこにはムッツリーニと秀吉と美波が話していた。
様子から見て二人を待っていたように見える。
「どうしたの？こんな時間まで」
「姫路が明久たちが遅いので呼んでくると、お主たちは会わなかったのか？」
「・・・入れ違い？」
「姫路さんなら先生に頼まれたことを思い出したって」
「おう、それで先に帰ってくれていいと」
「そうかそれならわしたちも行くとするかのう」
そういって秀吉たちと一緒に学校を出ようとすると美波が明久の袖を引っ張る。
「アキ・・・その、さっきはゴメン」
「えっ？」
「さっきアキのこと殴ったでしょ？それで、怒ってない？」
「怒ってないけど、どうして？」
「あとで一緒に瑞希の家に行くのついていってほしいんだけど」
「いいけどどうして？」
「それは・・・なんていうか・・・」
顔を赤めて言い出そうとしたが雄二が「先に行くぞ」といったので二人で後ろを追いかけた。
「それに関しては後でいうわ」

「うん、わかった（もしかして美波も偽者のことかな？）」
外はすっかり日が落ちはじめ夕暮れ時の赤色にそれは染まっていた。
豆腐屋さんが街中で定番のラッパを吹きながら豆腐を売っている。
普通ならば他の生徒を見かけるのだが今日は不思議と明久たち以外の生徒を街中では見なかった。
「そういえば言っている人結構いるんじゃな」
5人で歩いていると急に秀吉が話を切り出した。
「なんのこと？」
「あの噂じゃよ、夕方一人で歩いていると偽者が現れるっていう」
「あたしもその噂聞いたわ」
ムッツリーニだけ知っていると思えば案外みんな知っている都市伝説なのかもしれない。
「もしかしたらこの学園、いやこの町は偽者だらけなのかもしれないのう」
学園だけじゃなくてこの町、確かに学園限定だという根拠はない。
「わからないけれど、そうかもな」
雄二が目をつむってそう答えたが心の奥では違うといいたそうな顔

をしている。
だが違うとは言い張れない。
「・・・もしかして先生たちも偽者なのかもしれない。それにFクラスの奴らも」
「そんな、ムッツリーニ・・」
「バカなこと言わないで！！！」
美波がムッツリーニに対して大声で叫んだその目は力強くそしてかすかな涙を浮かべていた。
「島田よ。ムッツリーニは例えばでいったのじゃよ。ほれムッツリーニ」
秀吉がムッツリーニに何かをアイコンタクトでとる。
何を言いたいのかムッツリーニはすぐにわかった。
「・・・すまん」
「いいわよ。私も大人げなかったわ」
そこでそれぞれがわかれる分岐点に来たのでいったん別れることになった。
ムッツリーニと秀吉が右に、雄二がまっすぐ、明久と美波が左に移動する。
「じゃああとでな」
「いったんはさよならじゃ」
「じゃあね」

分かれると明久と美波は二人きりになる。しばらくは二人とも黙っていたが美波がある程度歩くと唐突に明久に話しかける。

「さっきのことだけど」
「あっ、そうだったね。いったい美波はどうしたの？」
「アキも知ってるんじゃないの？」
「知ってるって・・・まさか！」
「そう、偽者のことよ」
「やっぱり。僕もうすうす気づいていたんだ。でもやっぱりそんなのおかしくない？」
「私もそう思いたい。けれど・・・」

「友達なんだから信じようよ。僕はみんなのこと信じるよ」

「いや違うの！私が見たのは、私が見たのは・・・」

もう一人のアキなの

夏場の冷たい風が明久と美波に吹き荒れることでしたの砂埃が目の前にくる。
しかしそれ以上にもう一人の自分、つまり偽者に美波が出会ったというほうが衝撃的だった。
しかもそれが美波ではなく自分自身のせいものだとなお衝撃性が高い。

「見たっていつのこと？」
明久も顔に動揺を隠せない。

美波が明久の偽者を見たのはそう・・・ちょうど明久が学園長室で鍵の報復をしているときだった。

実はあの時明久と雄二が学園長室に二人で入っていくのを見たのだ。

だがその時はまたいつもの悪戯だと思い特に気に留めることはなかった。

1階の購買部に美波はパンを買いに行こうとしたがその時はすでに人でいっぱいだった。

やっとの思いでパンを買って人ごみの中を通り抜けポケットの中にパンをしまい込もうとしたら財布が消えている。

この中で今財布を見つけるのは限りなく困難に近い。だから美波は誰か拾っている人を頼ることにした。

「あの～誰か落ちている財布を拾った人はいませんか！」

大声で叫ぶと大勢の人中から一本の腕とそれに握られている財布が現れた。

「ありがとうございます！投げてください！」

顔は後ろ向きだったものの正確に美波のところに財布が届いた。

そして唐突に投げてくれた人の顔が正面を向いた。

「ありがと・・・あっ！！！」

その顔は明久そっくり・・・いや明久そのものだった。

（あ、アキ？ってなんでいるの！さっきまで学園長室にいたはずじゃ？）

美波がまたも人ごみの中をかき分けて財布を投げてくれたところまで行ったがその時はもう明久に似た人物はいなかった。

今考えれば人違いとも考えられるがその人は確実に明久だった
と美波は思う。

～回想終了～

「アキはあの時、購買部にいた？」

「いや・・・美波の言うとおり僕は雄二と一緒に学園長室にいたよ。だから美波が言った僕は確実に僕じゃない」

「じゃあやっぱり・・・偽」

「そんなはずないよ、おそらく僕に似た人か人違いだよ」

「そうだといいけど」

「例えそうだとしても僕が美波を守るよ。もちろん姫路さんも」

「アキ・・・」

もうほとんど夜になろうとしていたが美波の顔が赤くなっているのが分かった。

「じゃああとでね。そんときは一緒に来てくれる？」

「いいよ、じゃあ5時にここで待ち合わせ」

「ありがとじゃあねアキ」

そして明久は美波と別れた。

このときのやり取りはのちの秩序に大きな貢献となるがそれはまた別の話。

第5話　「カラスがなく頃に」（後書き）

3日間で3話書き終えました。
ここまででもまだ前半。
そこから事件といい恐怖といいコメディーといいまだまだ終わりません。

もし読んだ人がいたならば感想をお願いいたします。

第6話　「絶望の先にあるものは」（前書き）

人が話をするときその目的の多くは自分をよく見せるためだといわれています。
例えへりくだって話したとしても自分はこんなにもできた人間だと言う事を見せたいのです。
そして人には会話することで自分の要求をすべて飲み込んでくれるという思い込みがあります。
型にはめて相手を分析する。あなたの心は読める。
これはある二人の姉弟の会話です。

第６話　「絶望の先にあるものは」

家に帰った明久は偽者のことより姉の玲にどう姫路宅に行くかを説明しなければならなかった。
ついさっきまで不純異性行為は禁止されたばっかりなのに、一日もたたないで女の子の家に行くことになってしまった。
これはちゃんとした説明をして玲を納得させなければ。
もしも適当な説明をしてしまえばどうなるかは明久が一番よくわかっている。
入院だけはしたくないしそうでなくても学校を何日か休むことになる。
今の明久にとって偽者どうとかいう問題ははっきり言ってどうでもよかったのだ。

（さて、姉さんにどうこのことを・・・まさか偽者がいるから姫路さんの家に行くなんて言えないしな。てかそもそもいるのかもわからない偽者の名前を出せるわけないし。あああああどうしよう？）

明久は１０分前位からずっと玄関前でうろちょろしていた。
右に行ったり、左に行ったり、右に行ったり、左に行ったり、左に行ったり・・・

（これ以上いってももうどうにでもなれだ！）

と目の前のチャイムを鳴らそうとすると隣の部屋の玄関が空いた。

「アキ君たら、そこで何してるんですか？」

（えっ？姉さんなんで隣の部屋に？ってあれ、表札が僕の家のじゃない）

そこで明久は思い出す。左に二回行ってしまったので別の部屋の玄関前でうろちょろしていたのだ。

「そんなところでうろちょろしてたら不審者みたいですよ？姉さんはアキ君に不審者になってほしくはありません」

「姉さんこそこの家に来るときにバスローブで来たじゃないか」

明久の脳内にあの時の思い出がひしひしと蘇る。

～回想開始～

「ね、姉さん？」

「はい、お久しぶりですねアキ君」

本来ならばその人は海外にいるはずでこの日本にいるはずはないのだが、短めに揃えられた髪をわずかに揺らしながら彼女は言った。

明久の姉・・・吉井玲

なぜかバスローブ姿で。

「なんでバスローブ姿なのさ～っ！」

なんで帰ると言う事を連絡してくれなかったのかという当たり前のことを吹き飛ばしてくれるほど目の前の世にもシュールな光景に度肝を抜かれる。

風呂上りにバスローブをつける人ならわかる。テレビなどで何度か

見たことあるから。

しかし室外の使用に適しているかと言われ「はいそうです」などとは一度たりとも聞いたことなかった。

彼女がここまでバスローブ姿で来たのにはれっきとした・・・いやあまりにも常識からかけ離れた理由があった。

「今日はあまりにも暑かったので、重い荷物を持っていたことも重なり姉さんはたくさん汗をかいてしまいました」

「うん」

「途中までは気にしなかったのですが電車の窓に映った汗だくの自分の姿を見て姉さんは思いました。一年ぶりに合う弟に汗だくのままの自分を見せるのは正直いかがなものかと」

「まあたしかにいかがなものだよね」

「そこで、全身の汗をなんとかするために姉さんはバスローブに着替えたというわけです」

「ちょっと待って、そこんとこおかしい」

「持っている荷物の中で最も吸水性の優れている服だけあって、姉さんの汗は見る見るうちに落ちていきました」

おかしすぎる、なぜタオルで拭くという選択肢がなかったのだろうか？

そもそも着替えたってどういうこと？まさか電車内で人の目も気にせずに着替えたのか。

僕はその時分かった確かに汗だらけでは清潔感はないが、かといって汗が引いていればまともに見えるわけではないということを。

～回想終了～

（はあ～姉さんのほうがよっぽど不審者だよ・・・）

「そんなこと思うのならば玄関を閉めてもう二度とあけてあげませんよ」

（げっ！心を読まれた！？）

玲が玄関を閉めようとしたので明久は急いで中に入る。

さてこれからが問題だ。先ほども言った通り明久の今の課題はどのようにして玲に姫路の家に行く許しを請う事だ。

７月３日　現在時刻：１６時２６分

姫路さんの家に行くまでまだまだ時間はある。

まずは自然にしてそしてなんとなくという勢いで「今日勉強会があるから姫路さんの家に言ってもいい？」と聞けばミッションコンプリートだ。

「そういえばアキ君、最近近所で妙な噂が流行っているみたいですね」

「ひゃい？」

ソファーに座りながらどのようにすればいいかを考えているをしている明久に突然玲が話しかけてきたので変な声を上げてしまう。

「この辺に偽者とかそっくりさんがいるという」

「えっ？その噂なら僕の周りでもみんないってるけれど、それって文月学園の中の話じゃないの？」

「姉さんは最近近所にできた大きなスーパーで聞きましたけれど」

「姉さんは信じてるの？」

「何がですか？アキ君が姉さんのことを溺愛しているということですか？」

「違う違う違う！絶対に違う！だからその、偽者の存在だよ」

「姉さんは信じていませんね。やはりそういうのは根拠が大事ですから」

「そうだよね～時々あるんだよね。やっぱり根拠がない噂は信用できないよね～」

今までなにかとそのことで悶々としていたので玲のその一言は非常に安心があるのだ。

「ま、根拠がなければの話ですが・・・」

「えっ？姉さんなんか言った？」

「なんでもないですよ？」

小さい声で何か玲が言ったように見えたが明久は何を言ったかまではわからなかった。

一応何気ない会話で場の空気はキャッチした。
あとはなんとなくそしてさりげなく姫路さんの家に行く許可をもらえればＯＫだ。

（さて、あともう一息。頑張れ明久！）

次は何の話題を提示するかが問題だ。
もう偽者の件は言ってしまったし、かといって全然違うことを言っても怪しまれる。
ここまで来たら2日後に控えた期末試験の話題召喚するしかない。
そうだよ。期末試験の話をしてそれで今僕の勉強がやばいから学年トップクラスの姫路さんに教えてもらう。
さらに秀吉やら他のメンバーにも手伝ってもらうといえば姉さんも許してもらえる。

（これで完璧、僕のミッション）

と玲に期末試験に関しての話題を出そうとしたその時。

「あっ、そうです。先ほどアキ君のお友達の姫路さんから連絡がありましたよ」
「え？」

これは出ばなをくじかれた。
自分が話しかけようとしたのに逆に相手に話しかけられてしまうだなんて。
しかし姫路さんから明久に連絡だなんて何かあったのかなと思う。

「姫路さんから？いったいなんて連絡があったの」

「今日、アキ君と一緒に勉強するのでよろしくお願いしますと」
「そ、そうなんだ（姫路さんたら、僕がどう姉さんに質問するか悩んでいるの知ってたのかな）」
「アキ君？姫路さんが『一緒に』と言っていましたけれど…まさか不純異性交遊じゃ」
玲が笑顔のまま拳をつくる。やばいっ！このままでは殴る蹴るの暴行が引き起こされる。
「違う違う違う。秀吉に雄二にムッツリーニ、あと女の子は美波が来るけど。決して不純異性交遊なんかじゃないから安心して」
ウィンクして玲に何にもやましい気持ちなんてありませんよアピールをする明久。
「そうですか…ならわかりました。勉強のことなら姉さんは特に文句は言いません」
「よかった」
明久は腕を下にぶらんと落として今日一番ほっとしたような顔をする。
「…でも姉さんに隠し事をするなんて酷いアキ君。そんな酷いアキ君には」
明久を脅かすように握った拳に「はぁ～」と息を吹きかける玲。
「う～ん、酷いこと　ねぇ」
「はい。酷いことです」

笑顔でそういうが明久はそこまでの恐怖は感じない。
なにしろ毎日毎日、異端審問会や鉄人やその他もろもろ日々生命の危機と闘う明久にとってげんこつ程度だなんて笑い草だ。

「酷いことってどんなこと？」

余裕たっぷりで玲に問いかけてみる。笑顔の怒りはいまの明久にとってはあまりにも迫力不足。
そんな様子に困ったのかは知らないが明久に向けていた視線を別のところに泳がせながら言った。

「そうですね…その、とにかく酷いことですよ。アキ君がこれ以上姉さんに余裕ぶった態度をとれないような…それほど酷いことです」

「あはは、やれるもんならやってみてよ」

すると姉さんは笑顔のまま明久の目の前に近づく。
あれ？この感覚はどっかで体験したことあるような…どこだったけ？

ドガッ！　バキッ！　ボコッ！　（明久の顔や体をひたすら殴る音）

「ギャアアアアアアアアアアッ！！！許してえええええ！！！」
明久に悲痛な悲鳴は誰にも届くことはなかった。

「アキ君。これにこりたらもう姉さんに隠し事はしませんね？」
「はい、絶対しません。約束します」
「じゃあ行ってらっしゃい。ちゃんと勉強してきてくださいね？」
「うん、行ってきます…グスッ」

ボロボロの状態で明久は玄関を出る。女の子の家に行くたびにこれでは身が持たない。

明久宅のマンションから出るとそこには私服姿の美波がたっていた。

「遅いわよアキ、何やってたの？」

「ご、ごめん。姉さんにちょっと拷問されてて、もしかして待ってくれたの？」

「そうよ。で、でも、アキのために待ってたわけじゃないんだからね！約束だったから仕方なく待ってたのよ」

美波は顔を赤くしてそっぽを向いてしまいそのまま先に行ってしまう。

明久は「ありがとう」を言う暇もなく美波の後をついてゆく。

「美波はまだ気にしてるの？偽者のこと」

「気にしてないけど、やっぱりなんとなく恐いじゃない？」

「でも姉さんは根拠のない都市伝説はやっぱり単なるうわさだって言ってたから」

「そうだといいわね・・・」

美波は暗くなりつつ空を見上げて言った。やっぱりそうはいっても怖いのだろうか？

人通りの少ない道なので二人の周りに吹き荒れる風の音までもよく

聞こえる。

（僕もやっぱり疑心なんとかになりそうだから、美波のことをあまり悪くは言えないけれど）

「な～んちゃってね♪まったくアキはバカなんだからそんな考え込まなくていいの」

心配そうな顔をしてみる明久に美波が笑顔をだす。その顔は夜なのに真昼間のような明るさがあった。
やはりそういう顔を見ると明久まで安心する。

（よかった。そんな気にしてなくて）

「じゃあ早く行こうよ。もしかしたら雄二たちも、もう姫路さんの家についてるかも」
「そうね。じゃあ早く……はっ！」

何かに気付いたように後ろをばっと振り向く美波だがその顔はなにか恐怖におびえたような顔をしている。
まさかとは思うが明久は一応聞いてみることにする。

「美波どうしたの？」

「誰かいる。あたしたちのほかに誰かが後ろからついてきてるような」

「それってもしかして…いやいやそんなはずないじゃないか」

「でも土屋だって言ってたじゃない。夜道に一人で歩いていると偽

者が現れて」

「大丈夫だよ、今は一人じゃないんだし何かがあっても僕が守って」

「アキ…」

美波はまたも顔をボッと赤くなってしまう。

その時歩く音が二人の周りに響く。他には人がいないので靴の音がよくわかる。

建物と建物の間から人の影が見える。

その影がどんどんどんどん大きくなっていくことで近づいていくことが目にもわかる。

そこから出てくるのはいったい誰だ？

もしそこから出てきたのが自分だったらその時は言葉では言い表せないほどの絶望が襲ってくるだろう。

そう考えているうちに建物の間からバッと人が出てきた。

「キャアアアアアアアアアアアアアッ！！」

美波が人通りの少ない道で絶叫する。

明久もそれにつられて叫びそうになるが、そこに現れたのは。

「なんじゃなんじゃ？どうしたというのじゃ二人ともいきなり大声出して」

秀吉だった。

「ひ、秀吉？」

「そうじゃよ。お主らの話し声が聞こえてきたので合流しようと思ったのじゃ」

「脅かさないでよ木下。もうビックリしたじゃないのあ～も～」

目にはかすかな涙を浮かべて安どの表情で肩をなでおろす。
やっぱり偽者なんてそうそういるわけがない。
例えそう感じたとしてもそれは偽者ではなく今のような結果が待っているであろう。

目の前にあるのは絶望ではなく安心。

明久と美波と秀吉三人で姫路宅につくと玄関前には雄二とムッツリーニがたっていた。

「どうしたの？」

明久が話しかけると二人もこちらに気付いたようだ。

「ああ、俺たちも今ついたところだ」

「……同じく」

「じゃあ早く入ろう」

チャイムを押すと数秒もしないうちに玄関がゆっくりと開く。

そこからは瑞希が顔を半分出して笑顔で応対した。

「いらっしゃい、みなさんさあ中に入ってください・・・」

「う、うん」

ドアを全開にした瑞希が明久たちを中に入れるがその間ずっと笑顔だったのは少し気になった。
そして全員を家の中に入れたのを確認するとこれまたゆっくりと扉を閉めた。

いらっしゃい

第7話　「悪魔の料理人ジャンケン」（前書き）

像は人に勝ち、人は蟻に勝ち、蟻は像に勝つ。
つまり象は人を踏み潰し、人はアリを踏みつぶし、アリは象を刺し殺すということです。
インドネシアではこのよう三すくみの関係を使った手遊びがあるそうです。
日本人の良くやる『アレ』に似ていますね。

第7話　「悪魔の料理人ジャンケン」

７月３日　現在時刻：１７時４９分

夏なのでそこまで暗くなってはいなかったが周りの家の明かりはほとんどついていなかった。

いや正確には明かりはちゃんとついているのだが窓の光はなぜか真っ赤だった。

不気味な位赤いので逆についていないように思えるのだ。

真っ赤な電球が今はやりなのだろうか？

もしそうだとしたら今の流行というのは全然明久たちには理解することができなかった。

おそらく一生そんな真っ赤な電球など自分の自宅につけることはない…だろう。

（ここで姫路さんをよく観察すれば偽者なんかじゃないことが証明できる。いや…そもそも偽者なんか存在しないことも）

偽者なんかいないと自分に言い聞かせてもそれは単なる論理にすぎない。

そもそも明久の脳で論理だのなんだの言っても理解できるわけもなくやはり形にできる証拠がなければすべて無駄なこと。

ずっと笑顔のままである瑞希をのぞいて美波、雄二はなにか思いつめたような顔をしている。

おそらく彼らも偽者のことを考えているのであろう。

今日の朝知った噂なのにどんどんパズルのピースがはまっていくことでかすかな確信が生まれてしまう。

でもそれとは別にそれを信じたくないという気持ちもある。
ムッツリーニはまだこれといった偽者の出来事がないのでいつもと同じカメラを持った状態でシャッターチャンスを狙っていた。
秀吉もまだこれといった出来事がないのでいつもと同じ感じであった。
（二人は気楽でいいな……そもそもこの噂だって最初はムッツリーニが言い出したのに。でも責めるわけにもいかないから）
「明久。そんなに考え込むなよ。バカなんだから」
「その言葉今日だけで何回聞いたと思ってるの！てかなんで僕の心がわかるの？」
「バカだから顔に出てるんだよ」
「え～！！！ちょっと秀吉」
「なんじゃ明久よ」
「僕って思ってることすぐに顔に出してる？出してないよね」」
「う～ん・・・出してると言ったら出してるんじゃないのかのう」
「うっそ～ん、僕これからは何も考えられないじゃん」
「どうしたんですか？早く中に入らないと夏とはいえ寒いですよ」

そういえば明久たちは先ほどからずっと玄関前の外にいたのだ。
なぜか自分から中に入るのには気が引けたからので誰かが入ろうというのを待っていた。

「う、うん。じゃあみんな入ろうよ」
「そうね」
「そうじゃな」
「ああ」
「・・・入ろう」

明久がドアを抑えてその他の４人が瑞希の家に入り、それを確認すると自分も入る。

その時どこからかじっと自分を見つめる目線を感じる明久。

じっとじっとじっとじっとじっとじっと冷たい目線を感じるが気のせいだと思いそのまま扉を閉める。

中は今現在一人暮らしなのに驚くほど清掃されていた。
玄関の靴置き場まで誇りひとつなく大袈裟にいうが舌でなめても大丈夫なほどだ。

（これって僕たちが来るから掃除してくれたのかな）

一生懸命玄関やら廊下やらを掃除する瑞希の姿を想像すると涙が出てくる。

電球は周りの家とは違いちゃんとした明かりで決して真っ赤などではなかった。

やはり赤い電球などというイルミネーションは流行などではないのだ。

「そうだ姫路さん。お父さんやお母さんには僕たちが来ること伝えなくてもいいの？」

以前明久たちが二日連続で瑞希を夜遅くまで連れ出した（内容は試験勉強）ことがあり、翌日瑞希から家で両親にすごく怒られ週末までの間学校以外の外出を禁止されてしまったのだ。

当時一人暮らしだった明久にとっては到底縁のない悩みだったが今になってはその気持ちは痛すぎるほど分かち合える。

雄二も事前に連絡すれば瑞希の両親も安心しただろうというがその所は瑞希もわかっているらしくこれからはそうするつもりだという。

だから今回はきちんと連絡したほうがいいと明久なりにちゃんと覚えていたのだ。

「大丈夫です。深夜まで出かけるのは禁止ですがお友達を呼ぶのは構わないと。逆にそっちのほうが安心だと両親も言ってました」

なるほど。

今現在瑞希の家にいるのは６人でそのうち４人は高校生男子。

泥棒だってそこまで知っていたら入りはしないだろう。

「だから皆さんが何時までいても大丈夫ですよ・・・・・・何時まででも」

「あ、ありがとう。あっ！そうだ」

何かを思い出したように明久は雄二のほうを向く。雄二は何かわからず？を浮かべている。

「雄二は霧島さんに今日女の子の家に行くって言わなくていいの？なにもいわないと怒るんじゃないの」

「・・・・・・・・・・・・・・」

雄二のここまで『しまった忘れてた』という顔を見たのは先ほどの瑞希の話以来だ。

そうあの時は

～回想開始～

深夜になってしまった姫路さんを家に送るために屈強な雄二が名乗り出たのだが。因みに二日連続。

「二日連続で女の子と夜遅くまで出かけているうえに、昨日は途中までだけれど姫路さんと二人きりでしょ。霧島さんは怒らないの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

この時も雄二は『やってしまった』と恐怖におびえたような顔をしていた。

「まあ大丈夫だろ。ばれなければ何の問題も」

「…雄二。その話向こうでもう少し詳しく聞かせて」

異様な空気を漂わせた霧島さんが雄二の後ろに立っていた。

「まぁ待て翔子。お前は何か勘違いをしている。お前の考えているようなことは何も起きていないし、そもそもお前に俺が責められる謂れはないぞ」

だが霧島さんは雄二の襟首をものすごい勢いでつかむ。

「…うん。言い訳は向こうでゆっくりと聞かせてもらう」

「話せばわかる翔子まってくれ！ウワアアアアアアアアアアアッ～！！！！」

引きずられた雄二は悲痛な叫びとともに教室を後にした。

直後に明久の携帯電話に電話の着信音が鳴り響く。

【着信　坂本雄二】

「も、もしもし？」

『明久か？助けてくれ！！！何とか翔子に弁解を！や、やめてくれええええええええええええ！！』

雄二の絶叫とともに電話は切れた。

その後白いブラウスに赤い液体をつけた霧島さんが帰ってきたが雄二が帰ってくることはその日二度となかった……

～回想終了～

今考えてみればあれはおそらく・・・いや考えないでおこう。

雄二も同じように回想していたのでトラウマが思い出してしまった

らしくさきほどからずっと震えている。
「坂本よだいじょうぶかの？明久よ何とか言ってやってはどうじゃ」
「そうだね。雄二？」
「なんだ明久」
「大丈夫だよ。ほらもし霧島さんならばもうとっくのとうに捕まえに来てるはずだから。それに…」
「それになんだよ？」
「朝の様子からしても霧島さんがそこまで怒るとは考えられないんだ」
朝といえばなぜかいつも以上にテンションが高く優しい漢字の霧島翔子。
「そうか・・・そうだよな！」
心の底から安どの表情をする雄二。これでいつも通りに戻った。
「皆さんどうしたんですか？廊下にいると寒いですから早くリビングにどうぞ」
瑞希の声で気づくがそういえば今度はずっと廊下にいたのだ。
もうなんの心配もしない明久たちはリビングに急いで入る。
だがそこには偽者の疑いとは別の恐怖が待っていた。
「このおいしそうな感じのする匂いはまさか・・・」

台所に入るにはリビングの奥にある扉を開けなければならずムッツリーニがそっと開ける。
少しだけ扉を開けてそっと明久、雄二、秀吉、ムッツリーニの四人で見てみるとそれはあった。
瑞希が鼻歌を歌いながら包丁でねぎを切っているのだ。

「姫路さんが料理を作ってる」

これは大変だ。４人の顔が一斉に驚愕の表情に変わる。
あんなに楽しそうに作っていては今から何か言うわけにも到底いくまい。

つまり美波をのぞいた誰かが犠牲になって料理を食さなければならないのだ。

「どうする？」
「決まってるだろ」
「わしも異論はない」
「…同じく」

こうして瑞希宅で執り行われた『第一回　チキチキ恐怖のジャンケン対決！』

瑞希はまだ台所で料理の最終段階の下越しらいをしている。
鼻歌を歌い少しばかり踊りを加えながら楽しそうに包丁を切っている。

美波は事の容量があまり理解していないのか目を丸くしてみている。

「明久、ルール説明だ！」

「ＯＫ」

ルールはいたってシンプルだ。４人でジャンケンをして勝った人から抜けていき最後に負けた人が敗北という勝ちぬけ方式。

ここまでは誰でも一度はやったことのあるジャンケンだが問題なのは最後に敗北したものには死の鉄槌が襲ってくると言う事だ。

１位と２位と３位はまだいい。しかし４位になった人は姫路さんが作った料理をすべて一人で平らげなければならない。

「アキたちどうしたの？いきなりジャンケンしようだなんて」

「美波・・・男には・・・男には・・・やりたくなくともやらねばならない時があるのだよ」

「へぇ～カッコいいじゃない。プライドをかけた勝負いいじゃない」

そんないいものじゃないうえにプライドではなく命を懸けた勝負なのだ。

「「「「よしいくぞ～最初はグー！ジャンケン　ポン！」」」」

『明久：グー　雄二：グー　秀吉：グー　ムッツリーニ：パー』

ムッツリーニの一人勝ちだ。

「ちくしょおおおムッツリーニだけが勝利かよ」

「二回戦だ」

「「「最初がグー！ジャンケン　ポン！」」」
『明久：パー　　雄二：パー　　秀吉：チョキ』
秀吉の一人勝ちだ。
「うっそおおおおおおこのままじゃ危険だ」
「そんなの俺だってそうだ。これが最後！いくぞ」
「「「最初はグー！ジャンケン　ポン！」」」
『明久：チョキ　　雄二：グー』
雄二の勝利。
明久の顔はみるみる青くなっていき倒れそうになる。
「おっと明久。ここで気絶しようたってそうは問屋がおろさないぜ」
「お願い！僕を見逃してこのとおり」
「ダメじゃ明久よ。潔くあきらめるんじゃな」
「そんな秀吉まで」
丁度その時扉が開き両手に皿を持った瑞希が笑顔で現れた。
「さあできましたよ、みなさんで食べましょう」
から揚げ、麻婆豆腐、鮪の刺身が机の上に置かれる。
一見すると限りなくおいしそうだが実際どんな味かは想像がつく。
「明久、ほれ」
「うん。わあ～凄い料理だ！まず最初に僕が食べていいかな～」

はっきり言って上の発言はすべて棒読み。しかし

「いいですよ、どうぞ明久君」

せっかく姫路さんが僕たちのために一生懸命料理してくれたんだ。ここは男明久食べるのみ。

渡された箸を持ちあげたてのから揚げを一つ口の中に頬張る。

「どうだ？」

「どうじゃ明久？味は」

「…言葉にできない？」

「うん、言葉にできないよ。おいしすぎて！」

明久の言葉に全員が驚きの表情を浮かべる。瑞希の料理がどんな感じかは彼らが一番よく知っているし今回も死ななければよいとばかり考えていた。

「本当に上手いのか明久？」

「うん！めちゃくちゃおいしいよ」

横で美波が料理を一つ口にするとこれ以上ないまでに美味という顔をする。

他のメンバーも戸惑いながらも料理を口にした途端「おいしい」「美味い」という言葉を口にする。

「どうやって作ったの？」

「いや普通ですよ。普通にレシピ通りに作ったらこうできたんですよ」

褒められてうれしいはずだが瑞希の顔から少しだけ笑顔が薄れているような気がした。

台所にはたくさんに作り置きがあったのですべて食べるころにはすっかりお腹がいっぱいであった。

「もう食べられないよ」

「俺もだ」

「わしも」

その時瑞希が一つの箱をどこからか持ってくる。その中にはなんとメロンが入っていた。

「どうですかみなさんこのメロン？」

瑞希は先ほど通りの笑顔でメロンを食べないかを明久たちに勧めてきた。

「ごめんなさい姫路さん。僕もうお腹がいっぱいで」

「え？」

「俺もだすまねえな。それにほら、ここに来た本当の目的は勉強なわけだし」

「そうですね」

「わしらもそろそろちゃんとやんなきゃな」

「そうね瑞希にも教えてもらいたいことあるし」

「わかりましたじゃあ勉強はじめましょう」
勉強道具をとりに部屋に戻る瑞希だがメロンが持った箱に爪が食い込んでいることには誰も気づかなかった。
７月３日　現在時刻：２２時００分
十分に教えてもらったところだしこのままあまり長居しても失礼なのでそろそろ帰ろうとする明久たち。
「一通り終わったし僕たちはこのへんで」
「そうね、明日も学校あるんだしそろそろ帰らないとね」
「わしも早く帰らないと姉上に叱られてしまう」
「・・・写真の現像しないと」
なんだって？写真がどうとか聞こえたが気のせいか？
「そうですか…皆さんもう帰るんですね。わかりました」
瑞希の顔に何か腑に落ちないところがあったのだろうかと思ったがすぐに笑顔になったので心配はないと明久は思った。
家の扉を開けると外はもう真っ暗。街灯もついたり消えたりだ。
「ではみなさんまた明日学校で」
そういうと瑞希はゆっくりと玄関を閉めた。
「明久にしては数時間の間よく勉強したよな」
「そういえばアキにしてはよくやったよね」

「ふむ、明久にしてはよくやったほうじゃとわしも思うぞ」
「…よくやった」
「って明久にしてはってどういうこと？それじゃあまるで僕が普段勉強してないみたい…」
「「「「してないじゃん」」」」
四人に一斉に突っ込まれたので言葉をなくす。
「あっ！姫路さんの家にカバン忘れた」
手に持っているはずのカバンがないのに気づきすぐさま瑞希の家に取りに戻る明久。
「バカだなあいつはふつう気づくだろ」
「よいんじゃ。あれが明久のいいところなのじゃから」
「…明久の長所はバカなところ」
「どんなところだよ。まあいいや行こうぜ」
４人はそのまま自分の帰路についていった。美波だけは夜道なので雄二が家までついていく。
瑞希宅のチャイムを鳴らすがなぜか応答しない。不審に思って扉を動かすと空いてしまった。
「鍵がかかっていないのかな？まさか泥棒！？」

一応靴を脱いでリビングのほうに向かうと台所の扉から包丁の音が聞こえる。
のぞいてみると瑞希が先ほどのメロンを切っているみたいだ。
（なんだいるみたいだよかった）
「姫路さん、忘れ物しちゃって取りに来たんだけど」
しかし瑞希は返事しない。
集中していると思い明久はそのままそっとしておこうと一人でみんなで勉強した2階に向かう。
【姫路瑞希　目線】
「明久君たら酷いですね！私がせっかく用意したメロンを食べてくれないだなんて！」
『だんて！』の部分で勢いよく振り落した包丁がメロンを半分に切断する。
「他の皆さんが余計なこと言わなければあのまま食べていたのに！」
メロンを切る
「余計なことしちゃって！」
メロンを切る
切りすぎたのでメロンは縦にバラバラになった。
「まあいいですよ、一人だけ食べて眠られても困るんでね・・・そ

れに計画はあとすこし」

包丁を思いっきりまな板に突き刺す。

【姫路瑞希　目線　終了】

明久は忘れ物も取りに行ったところで瑞希に帰りますの挨拶をしようとまた台所に向かう。

『このメロンもおいしそうですし私が食べましょう・・・』

ニヤリと口元だけ笑った瑞希。

その瞬間！！！

『ウオオオオォォォォォ～ガアアア～』

人間とは思えない不気味な声を上げると瑞希の口が突然裂けて牙をむき出す。

そして喉からは二つに割れた舌が全てのメロンをキャッチする。

「姫路さん～忘れ物見つかったから帰る・・・えっ、ん？」

明久が見たのは『ジュルジュルジュル』とグロテスクな音とともに舌のようなものが台所の扉のスキマから見える。

瑞希の口はさらに避けていき顔の半分以上が牙の生えた口でおおわれる。

メロンを皮ごと食べるような音が明久まで聞こえる。

「姫路さん？姫路さん？姫路さん！！！」

振り向いた瑞希の顔は先ほどと変わらない清楚な顔をしている。

「あら明久君ではないですか？そんな大声出してどうしたんですか？」

「い、いや、忘れ物を取りにきたから帰りますって言おうと」

「そうですか・・・忘れ物はありましたか？」

「うん。ありがとうじゃあね。また明日」

明久はそのままバッグを持って瑞希の家を出てそのまま振り向くことなく家に帰った。

一人になった瑞希は口についたメロンの種を舌でなめると静かに食器を洗いだした……

第8話　「恐怖の思惑」（前書き）

視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚
人間の五感で捉えられるものはこの世に存在するもののほんの一部にしかすぎません
例えば犬は人間が知覚することのできない高周波を容易に聞き分けることができます
これと同じように目に見えるものがすべてを物語っているとは限りません
では…我々の目に見えない存在というのは一体
もしかしてそれは見てはならぬ恐ろしいものなのかも知れません

第8話　「恐怖の思惑」

7月3日　現在時刻：22時34分

明久が鞄を瑞希宅に忘れてしまい、それを取りに戻った。
そこで世にもおぞましい豹変をした瑞希だったが幸いにもその姿を明久が見ることはなかった。
もしも、もしも、明久がその目で見てしまったらおそらく精神的にも肉体的にも立ち直ることはもう2度となかっただろう。
口が裂けて、舌が異常に長くなりその上先端が2つに割れて、メロンを皮のまま全て丸かじり。
だが振り向けばいつもの姫路瑞希その人であった。
一方で雄二、秀吉、美波、ムッツリーニの4人は街灯も消えかかっている夜道を歩いていた。

「アキのこと本当に待たなくてよかったの？」

立ち止まった美波が心配そうな顔で目の前の3人に言った。
本当はあの時美波の提案で瑞希の家の前で明久のことを待っていた。
だが5分たっても明久は一向に家から現れなかった。
それもそのはずで明久は瑞希の部屋を開けるか開けないかでずっとこう着状態にあったからだ。

（開けたら迷惑かも、でもあけなきゃ忘れ物をそのままにするしかないし、かといって…ああ！僕はどうすればいいんだあああ！）

さっさとあけて余計なことをせず忘れ物だけ取りに戻ればいいものの結局明久は１０分近くそこで右往左往していた。

明久を瑞希宅の玄関前で待っている４人だったが夏の２２時と言えばジメジメした蒸し暑い夜。

じっとしているのは限りなく拷問に近かった。

かといってこのまま帰っていいのかという不安もある。

不安をだれも口にしなかった、いや口にできなかったのだ。

～偽者が自分のすぐ近くにいるかもしれない～

誰もがそんなことあるはずないと思っていた。

特に雄二と美波は「そんなことない」と思うより現実を受け入れたくないと思っているほうが強かった。

目の前に明久にそっくりの人間を見てしまった美波

急激に性格が変貌してしまった霧島さんの近くにいる雄二

それが単なる偶然ならばいいがムッツリーニの話を聞いてからそうはいかなくなってしまった。

それなのにムッツリーニといったらそんな噂などすっかり忘れてしまったという顔をしている。

（私達がこんなにも悩んでいるとも知らずに・・・木下もいいわよ

ね）

そんなこと考えているうちにもう時刻は２２時３０分近くなっていた。

「もう帰ろうぜ、明久ももう先に帰っちまったんだよ」

「そうじゃな」

「・・・明日もあるし帰ろう」

「ほら島田」

「わかったわよ、じゃあ帰ろう」

結局４人で瑞希宅の近くを後にするとき丁度２２時３０分のアラームが秀吉の携帯からなった。

美波は瑞希宅が見えなくなるまでチラチラ家のほうを見ていたがそれが見えなくなるまでそう時間はかからなかった。

夏で少しは明るいかもしれないが街の街灯はほとんどついていなかった。

目の前が真っ暗になると言う事ではないが後ろの家などは２０メートルも歩けば見えなくなった。

「そんなに明久のことが心配ならば俺がついて行ってやろうか？」

「そ、そんな心配なわけじゃないわよ」

「じゃあそなたはなぜに姫路の家の方角ばかり気にしているのじゃ？

「いやそれは・・・その・・・いいじゃない！夜遅くだからすこーしだけ心配になっただけよ」

「それなら大丈夫じゃろ、明久もああ見えて男なんじゃから」
（でも本当はただ心配なだけじゃないんだろうな。島田の場合は）
なぜ明久を心配しているのかその理由をなんとなくわかった雄二。
だがそのことはあえて口には出さなかった。
「・・・でももしも現在明久が姫路の家にいたとしたら」
ムッツリーニがボソッと口を開いた。
とっさに美波が目をクワッと大きく開いて後ろを向く。
「年子のの娘が夜に一人では危ないからの」
「そんなわけないじゃない。さっきだってアキったら瑞希の家から出てこなかったじゃない」
「でもそれが本当ならば明久は夜遅い時間に姫路と一緒にいるってことじゃのう」
「・・・・・・・・・っ！」
ムッツリーニもびっくりして鼻血を出しそうになるがとっさに鼻を手で押さえて対処をする。
「だ！大丈夫よきっと」
「まじめな姫路のことじゃからおそらく今は片づけをしているじゃろうな」
「そ、そうよ。何も起こるわけじゃないしもしそうだとしてもすぐ

にアキも家に帰るわよ」
「だといいな島田」
雄二が真面目な顔で答える。
「良いも何もそれしかないでしょ！」
「もしかしたら明久の奴、姫路の家に泊まるかもしれないな」
「そんなことあるわけないでしょ！」
美波が顔を真っ赤にして否定する。
「しかしもし万が一にでもそんなことになったらどうなるのじゃ？」
「暴動が起きるなきっと」
「死のお仕置きは当然よね」
「……異端審問会は人の幸せを許さない」
「まったくお主らというやつは」
その時雄二が何かを思い出す。
（あれ？この会話…朝にもしたような気が。そうだ！）
今朝、明久が両手に瑞希と美波を連れて学校に行ったときそのような会話をムッツリーニと秀吉でしたのを思い出した。
（でも確かその時はあいつら何もしなかったような）
異端審問会の連中は明久のリア充光景を見ても何もせずただ笑って

いるだけだった。

（おかしい、明らかにおかしい。あの様子を見て何もしないだなんていったい何を考えているんだ。まさかあいつらも！）

「坂本？」

（もしそれが事実だとしたらクラスで今現在偽者じゃないのは俺たちだけになる！そんまさか・・・じゃあ学校中やばいんじゃないのか！）

「坂本！！」

美波に呼び止められてはっと我に戻る。

「坂本は私と一緒にこっちでしょ」

「そうだったな」

３つの曲がり角に差し掛かる。

まっすぐ行くのは秀吉、右に曲がるのはムッツリーニ、そして左に曲がるのは雄二と美波だ。

「じゃまた明日」

そういって彼らはそれぞれの道へと歩いていく。

【美波　＆ａｍｐ；　雄二　目線】

「ねえねえさっき坂本は何を思ってたの？」

一応女の子一人では夜道を歩くのは危ないので雄二が家まで送って

いくことにした。
歩いているとき唐突に美波が話しかけてきた。
「はっ？それって」
「いや、さっき話しかけた時すごく驚いていたじゃない。何考えてたの？」
「何って・・・」
「まさかあんた学校中が偽者で埋まっているだなんて考えてたんじゃ！？」
「そんなことあるわけ」
「考えてたんだ」
目の前に美波がたちチラチラと目線を動かす雄二をじっと見つめる。
「ああ。一瞬考えちまったけどやっぱりそんなことあるがねえじゃないか」
「そうだよね。だけど本当に絶対ないとは言い切れる？」
「それは」
「あたしだって偽者がいるって根拠がない限りでは信じたくはないけど、逆に偽者がいないって根拠もないじゃない」
「でも俺たちにできるはなにもねえじゃん。ただそうじゃないと思う以外は」
「私もそう思うことにする。それにそんな噂あと少し経てば自然に消えるでしょ」

美波がニッコリ笑顔を作ると家までもうすぐ目の前なのでそれぞれ別々に歩きだした。
その時後ろからじっと二人を見つめる目線を感じた雄二。

「だれだ！」

落ちていた石を視線のほうに向かって思いっきり投げる。
街灯の影からじっと見ていたものはサッとよけてそのままいなくなる。

雄二がその場に走ると何かが落ちている。

「これは・・・」
「何が落ちていた・・・あっ！」

落ちていたのはなんと美波が普段つけている黄色のリボンと全く同じものだった。
あの時自分たちを見ていたのは・・・

「ちょっとこのリボンは」
「まさか」
「気のせいよたまたま落ちていたリボンが私のとそっくりだっただけ」
「そうだよな」
「うん」

「じゃあまた明日な」
「じゃあね」

（アキ、いざとなったら助けてね）

とは思うものの美波の顔は恐怖で真っ青になっていた。

【美波　&　雄二　目線終了】

【ムッツリーニ　目線】

7月3日　現在時刻：22時50分

4人の中で一番早く家に帰ったムッツリーニは先週1週間の中で撮った写真の整理をしていた。

文月学園最大のグレーゾーンでありムッツリ商会の元締めでもあり、彼が所有するコレクションには値がつけられないほどの価値がある。

期末試験前と言う事もあり特に目立った写真はなく内容は瑞希、美波、秀吉の写真が9割を占めていた。

その他の1割はほかのクラスの女子のハプニング写真。

そして内緒の明久生写真。

意外とこれの需要率が高くアキちゃん写真は一部のコアなマニアに人気が高い。

ムッツリーニ紹介2学年写真売り上げの半数以上はこの4人が占めていることになる。

（・・・今回も予約がいっぱいあるから急いで整理しないと、しかしアキちゃんの写真は久保がほとんどを独占してる）

整理している写真はざっと２０枚。
５枚は秀吉、５枚は美波、５枚は瑞希、そして残りの５枚はアキちゃん。
（・・・ないとは思うが一応ブレがないか調べないと。大事な商品だから）
１枚１枚入念に確認する。
どれもこれもが最高傑作。人一人の一番美しい姿を盗撮している。
（・・・そういえば朝から島田とか調子悪そうだったな。朝っていうとたしか俺が偽者が現れるって話をした時だよな）
写真をめくりながら噂のことを思い出す。
（・・・だけどあれは単なるうわさであってまさか本当に偽者がいるだなんて）
考えているうちに写真の確認は最後の１枚になってしまった。
その写真は瑞希がニコッと笑っている写真で偶然その瞬間を見たムッツリーニがシャッターを収めたのだ。
（・・・これが最後の１枚か。特におかしい所はない・・・・・・・・・ん？）
何か不審な雰囲気を感じたムッツリーニは写真を引き延ばしてみた。

（・・・こ、これは）

引き延ばした写真を見て驚愕する。

ピンク色の髪に豊満な胸、そして見る人の心を潤す笑顔は一般的には普通（？）の写真。

だがその後ろに背を向けているが一人の少女が映っている。

ピンク色の髪だった。

（・・・文月学園にピンク色の髪の生徒は一人しかいない。ということは！でも当の本人は写真に写っているし。じゃあ後ろに映っているこの女は誰なんだ）

これを売るわけにはいかないとムッツリーニは写真をマル秘ファイルにしまい込んだ。

【ムッツリーニ　目線終了】

【木下秀吉　目線】

７月３日　現在時刻：２３時００分

秀吉は今非常に困っていた。

帰ってみると姉の優子は風呂に入っていて秀吉も明日があると言う事で優子がお風呂から上がるのを待ちその後風呂に入って寝ようと思っていた。

その時ちょうどのどが渇いてコップを取出し緑茶を飲み干すと大事なことに気付く。

今持っていたのは秀吉のコップではなく優子のコップだったのだ。

（大変じゃ。すぐ洗って証拠隠滅しなければ）

すぐさま洗おうと洗面所に持っていこうとした瞬間手が滑ってしまう。

「あっ！」

といった時にはすでに遅くコップはバラバラに割れてしまっていた。

「どうするのじゃ」

風呂場からは優子の楽しげな鼻歌が聞こえる。

（このままでは非常にやばいんじゃ。姉上に殺されてしまう）

今から代わりを買いに行こうとしてもスーパーなどはもう閉店しているしたとえ開いていたとしてもそのコップと全く同じのがあるという保証はない。

一応破片はすべて回収してビニールの中にしまったがばれるのも時間の問題。

（家の中で隠すことのできる場所などないし、わしはどうすればいいのじゃ～）

その時優子が風呂から上がってきた。

とっさに秀吉は破片の入ったビニール袋を後ろに隠してしまう。

「どうしたのよ秀吉？なにかオドオドしているけど」
「なんでもないのじゃ」
「そう？それならいいけど」
優子はタオルで濡れた髪を拭きながら部屋に戻っていった。
（このまま黙っているわけにもいかんのう。いま言えば姉上も殺しはしないじゃろう）
骨折か明日の学校を休むぐらいの折檻で我慢しようと優子の部屋に思い切って入っていく。
鼻を歌いながら何やら上機嫌の優子。
「姉上」
呼びかけると優子も秀吉の姿に気付く。
「どうしたの秀吉？」
一応のため扉はすべて閉めず少しだけあけとく。
「あの姉上・・・その」
「なんか言った？」
秀吉は割れたコップの破片の入ったビニール袋を優子の目の前に出す。
「すまんのじゃ。悪気はなかったんじゃ」

顔にパンチが飛ぶと思い歯を食いしばって目をつむる。

だが

「そんなこといいわよ、秀吉だって悪気があったわけじゃないんでしょ」

「えっ？姉上はわしのこと怒らんのか」

どんな表情かと思いきや優子の顔は天使のような笑顔だった。

「怒ったって割れたコップは元には戻らないでしょ」

「姉上。ありがとうなのじゃ。このご恩は必ず」

「分かったから早く寝なさい」

秀吉は安どの表情で部屋を出ていく。

不気味な音を立てて扉が閉まると優子の笑顔は忽然と消えた。

「もうすぐね・・・秀吉も・・・フフフフフフフフフフフフ・・・・・・」

その顔は先ほどの笑顔とは逆。

瑞希と同じで口が裂けて長い舌を出した恐ろしい悪魔のような表情をしていた。

【木下秀吉　目線終了】

第9話　「２００３年の事件」（前書き）

悪の組織や宇宙からの侵略者に立ち向かう正義のヒーロー
そんな話の二つ三つは誰にでもすぐに思い浮かぶでしょう。
ところで私は疑問に思うことがあるのですが、現実には本当にそのような巨大な組織はあるのでしょうか？
私には何とも言えませんが少なくとも彼らの世界にはあるようですね

第9話　「2003年の事件」

６月１９日　現在時刻：２１時００分

ここは日本ではない某国。

２０１１年7月現在日本を含めて世界１９３の国が加盟して現在国際社会に存在する国際組織の中で最も広範・一般的な権限と、普遍性を有する組織である国際連合。

その中で世界政府上層部が直属の上司である一つの組織がある。

一般的に名前を知っているのは各国首脳と天皇のみとして組織内にいるものも自衛隊、航空隊、海軍などから選抜された選りすぐりのエリート集団。

『国際諜報機関ＡＭＳ』

世界中で起きた様々な事件。しかしそれは政府が公表を恐れるような内部事件に関してが多い。

よってマスコミがこの組織の存在を知ることはまずない。

例えマスコミが知ったとしてもその瞬間にその国の政府から厳重な圧力がかかることだろう。

テロやウィルスなどに関する事件もここで取り扱っている。

ＡＭＳ内でその日緊急会議が開かれた。

外からの太陽の日からに電気の付いていない広いオペレーションホール風の部屋にスーツ姿の男女が座っている。

そのほとんどが４０歳を超しているような人たちで何人か３０歳ぐらいの人たちがいる。

中心に近ければ近いほど組織の上層部が並んでいる。

壁には１００インチの巨大なテレビモニターもあるがまだ何も映っていない。

「これから合同特別緊急会議を始める」

「３０秒与える。会議をしたい奴はここに残りそれ以外の人間は速やかに会議室を後にしなさい。責任は一切取らない」

おそらく一番の古株と思われる７０過ぎの男性二人がカウントダウンをかける。

「私たちは誰も逃げたりいたしません」

「そうです」

「そうか、ならば始めよう」

「手元の資料を見てくれ」

机の上に全員分にコピーした数枚の紙が置かれていた。

『Ｂ'ｓ　Ｆｉｌｅ　-ブラッディファイル-　ＮＯ．１』と書かれたレポート用紙。

「こ、これは？」

「見てわからぬか？貴様はＡＭＳの英雄の名前も忘れたのか」

「いや・・・私はなぜこのレポートがあるのかと」

「上手くは言えないが簡単に言うと、ジェームスが所持していた」

「ジェームスさんが！」

「ブラッディが長年にわたって捜査していた恐るべき計画」

すると突然テレビ画面がつきその計画の名前が大きく表示される。

『ＧＢＲコーポレーションクローン計画』

一同が今日がの表情を迎えているその時一人の男が入ってきた。

「この会議に俺も参加させてくれ」

ばっと勢いよく扉を開けてきたのは今現在ＡＭＳ最高の英雄の一人で特殊工作員。

「ジェームスさん！」

ジェームス・テイラーという男だった。

「なぜあなたが？」

「クローン計画についての会議だろ。俺を呼ばないだなんてひどくねえか？」

「よく来てくれたな」

中心に座っているＡＭＳ最高責任者の一人であるドン・ワシントンが言葉を開いた。

「ワシントンさんは俺が来るのをわかっていたのですか？」

「ああ、私はお前と一緒に９年間を過ごしていたのだからな」

「ブラッディさんも忘れてはいませんか」

「忘れるわけないじゃないか、彼もこの組織の英雄だ」

「じゃあ会議を続けようか。なんとなくの流れはわかる」

「それならよかった」

ジェームスはワシントンが用意した隣の席に座る。
「思い起こせばすべての始まりは9年前のＤｒ．レノックスによる洋館事件」
２００３年1月に突如おこったＤｒ．レノックス事件。
ブラッディのファイルにはその事件の経緯が書いてあった。
２００３年1月１５日
遺伝子研究所”ＧＢＲ　ｃｏｒｐ．”の研究員およそ３０人が一斉に失踪してしまうという奇妙な事件が起こった。
ＧＢＲ　ｃｏｒｐ．は政府の機関として秘密裏に活動している研究所であるゆえこの失踪事件は表立ったものにはならなかった。
２００３年1月１６日
ＡＭＳ所属の特殊工作員ジェームス・テイラーのもとに一本のパニックの中で切られたと思われる留守番電話が入る。
『レノックスの計画は最終段階に…このままでは…暴走…研究員が危な…』
音質からしてそれはジェームスの婚約者であるソフィ・リチャーズであった。
ジェームス・テイラーとブラッディは国際諜報機関ＡＭＳからの指令によりパニックの中、切られたとみられる電話と、研究員失踪事件の関連を調べ始める。
政府上層部は、元ＧＢＲ　ｃｏｒｐ．所長Ｄｒ．レノックスがマッドサイエンティストに変貌し、非人道的な人体実験を行っていることを突き止めたので彼の館に一人の若手工作員を派遣した。
だがその工作員の最後の連絡には事件が最悪の事態に急変していることを伝え連絡が途絶えた。

２００３年1月１７日
ジェームス・テイラーはこの事件に対して自分を派遣してくれと直接政府上層部に頼み込んだ。
その件に関して政府は後日決定するといった。
ブラッディは以前からＤｒ．レノックスの不審な行動を監視して事件の一か月前の２００２年１２月に人間を人工的に作り出す実験を行っていることが分かった。

２００３年1月１８日
事態を重く見た政府上層部は工作員の切り札としてジェームス・テイラーとブラッディの２人を館に向かわせることにした。
とくにジェームス・テイラーは、ＧＢＲ　ｃｏｒｐ．に自分の婚約者”ソフィー”がいたため二つ返事でこの任務を受けた。

「そこでＤｒ．レノックス事件のレポートは終わっている。館でどのような事件があったのかは・・・」
「ワシントンさん。いまここで語るほどのことではありませんよ」
「そうだなお前らも何のことかわかっているな」

「当然です」
「忘れるはずがないじゃないですか。人類の存続がかかっている事件ですよ」

「ソフィ・リチャーズはジェームスの婚約者だったのにあのような結果になって非常に残念だ。政府は実は君を派遣するか直前まで判を押せなかったのだ。もしも・・・」
「ソフィは死んだわけではありません。事件がすべて解決すれば必ず」

「だがブラッディに関してはもう」

「ブラッディは最期の最期まで自分の任務を全うしました」

「２００６年にあいつになにがあったのか」

「２００６年９月に突然死んでしまったブラッディ」

ジェームスの目からはほんのりと涙が流れているように見えた。

長年一緒にいたパートナーが突然死んでしまった悲しみは５年たっても消えることはない。

しかし今思っても謎だった。

なぜブラッディは死ななければならなかったのか。消されたとしてもおかしすぎる。

「ブラッディが死ぬ直前に私にあることを話してくれました。明日とある人物に会うと…そしてその人物がすべてのカギを握っている…と」

ブラッディが死んだときに大切な友を失った悲しみと後悔の念が襲ってくる。

あの時の想い出はいまでも鮮明に覚えている。

ジェームスはパートナーの分まで最後まで戦い抜くつもりだと誓った。

「この会議に召集されたと言う事は見つかったのか？元凶の砦」

ジェームスが立ち上がって全員に聞いた。

すると３人の男がなにやら資料を持ち立ち上がる

「本当の元凶なのか１００％とは言いませんがＤｒ．レノックスと２００３年まで交信をとっていた女」
「その女が今の今まで保管していた地下研究施設」
「そして、その研究施設がある場所」

「どこなんだそこは！」

大きな声を上げるジェームス。
だがそれもしょうがない。
ここまでわかれば９年の苦労も報われブラッディの死も無駄ではなかったことが証明される。

そして人類滅亡も阻止することができる。

「一般的には決してわからない場所で研究施設と言えば正解でそうでなくとも正解」
「その場所は・・・」

「藤堂カヲルが学園長を務めている日本にある文月学園です」

文月学園という名前は外国にいるジェームスでも知っていた。
教育という観念では世界的にも有名で特に学園長の藤堂は権威のある研究者でもある。
文月学園の代名詞である試験召喚獣も彼女が開発したものだとされている。

だが少々マッドサイエンティストの一面があり生徒を実験動物扱いすることがあるので賛否分かれる人物である。

「彼女がＤｒ．レノックスと関係を持っていたとは・・・いま彼女

と連絡を取ることはできるのか？」

「・・・それが、失踪しているんです」

「それはどういうことだ？」

もしもそうだとしたらその時点で権威のある研究者が失踪とニュースになるはずだ。

それなのに何の情報も流れないとは・・・

「いや失踪したというか居なくなったというか文月学園には2か月ほど休暇を取ると申し出たもので、彼女もマイペースで学園側も失踪だとはだれも思わなかったのです」

「じゃあ今すぐに学園を」

「できないんです」

ジェームスがそう言おうとした瞬間に一人の男が遮った。

「なんで？」

「もう手遅れに近いんです」

「手遅れとはまさか！」

「２０１１年６月現在文月学園の８割、そして町の７割がすでに・・・」

「畜生！！！！」

拳で机を思いっきり叩きつける。

「だがまだ間に合うんだな？」

「はい、一応は」
「明日出発する」
「え？」
「明日にでも日本に行く。だが今の状態では目立った行為はできない。時を待っていく」
「ワシントンさんはいいんですか？」
話を聞いた男がワシントンに意見を求める。
じっと目を閉じてた男が静かにあける。
「世界政府上層部には私から伝える。おそらく彼らもＯＫするだろう」
「じゃあ行きます。準備がありますので」
「気を付けるんだぞ。人類を救ってくるのだ」
ジェームスはその言葉に一回も振り返らずその場を後にした。

2週間後の7月2日の夕方から明久たちの身に起こる事件

まだその頃は楽しい学園生活を過ごしていた

だがその学園もすでに恐怖によって支配されていたことを明久たちは知る由もなかった

第９話　「２００３年の事件」（後書き）

新年あけましておめでとうございます
２０１２年最初の投稿第９話はまたも明久が登場しないばかりかサイドストーリー的物語になりましたね。
オリジナルキャラのジェームス・テイラーは後にまた登場することでしょう。

実はこのキャラにはモデルがいるのですが誰だかわかりますか？
ここまで読んだ方、感想お願いいたします。

第１０話　「史上最低最高の４日間」（前書き）

「試験」といっても入学試験、学力試験といったものから製品の品質を保証するための試験
さらには昨今流行りの漢字や英語、数学などの各種検定試験など様々です
これから彼らはある目的を持った試験を受けようとしています
その目的はなんなのか？
そして試験の結果はどうなのでしょうか？

第１０話　「史上最低最高の４日間」

７月４日　現在時刻：０７時５６分
文月学園第１学期期末試験まで翌日に控えた７月序盤の朝。
先日は瑞希の家で試験勉強をして今日も学校でいつも以上に勉強するつもりだ。
なぜここまで彼らが勉強に精を出すのかそれには理由があった。

簡単な理由だ。
そして非常に奥が深い。
文月学園の期末試験は現代国語、古典、数学、物理、化学、日本史、世界史、現代社会、英語、保健体育の１０教科に加えそれらの合計である「総合教科」の１１教科である。
それを１日４教科で最終日のみ３教科の計３日間で執り行われる。
つまり７月５日から７日までが試験期間でその後生徒のための試験休みが７月８日から７月１０日までの３日間ある。
Ｆクラスは７月になる直前にあることを決めた。
期末休みの最終である７月１０日に試験召喚戦争をＡクラスに仕掛けると。

（それにしてもあれでよくぞＡクラスが試験召喚戦争に応じてくれたよな・・・）

学校へ行く道のりで明久は１週間前を回想していた。

～回想開始～
放課後に明久と雄二、美波、瑞希、秀吉、ムッツリーニ、そして残った数名のＦクラス男子はどのようにしてＡクラスに試験召喚戦争を仕掛けるかを会議していた。

「僕は嫌だよ絶対に。この前のＤクラスへの宣戦布告の時は酷い目にあったんだから」

２年生になって最初の頃、Ｄクラスと召喚戦争をしたがその際に明久は殺されそうになったのだ。
すごい剣幕で迫ってきた彼らは所謂ゾンビとも比喩できた。
その時のトラウマもあって明久は絶対にＡクラスにはいかないと言ったのだ。

「じゃあ誰が行くんだよ。吉井以外にふさわしい人物なんていないぞ」
「そうだよな。吉井が一番的役だ」
「おれも吉井以外に宣戦布告ができる奴なんていないと思ってる」
ここぞとばかりに言いたい放題言うＦクラスの奴ら。

「僕以外で誰か行きたい人は？」

全員に明久が聞くが誰も手を挙げる人はいなかった。

「俺にいい考えがある」

雄二が啖呵を切って教壇の前に立った。

「なんだなんだ？」
「いい考えって」
「教えろよ」

教室内居る者全員が雄二のもとへと駆け寄る。

「勝算ならある」
「雄二、それってどういう勝算なの？」
「それは・・・ってうわあ！」

明久を見てみるとその姿は文月学園の女子生徒の制服だった。
いつの間に着替えたんだ？という考えもあるがそれとは別になんで着ている？というほうが強かった。

「僕もわからないけどいきなりみんなに目隠しされて気づいたらこんな姿に・・・」

「かわいいです明久君」
「そうよアキ。このままでも十分いけるかもしれないわよ」
「・・・これは売れる」

ムッツリーニがカメラを構えて明久の女装写真を超激写する。
女装した明久、通称アキちゃんはE～Bクラスのメンバーにかけてかなりの高値で売買されている。

「これでAクラスに宣戦布告すればいいんじゃないの？」
「さすがにアキちゃんの状態じゃあいつらもひどいことできないと思うぜ」

「違う！違う！違う！！俺が言ってるのはそういう事じゃない」

教壇の上から大きく手を振る雄二。

「実は俺、さっきの昼休みの時に翔子に密会をとったんだ」

そういえば昼休みの時に雄二は重要な人物に会うと言って姿を消した。
姿を消したといっても屋上に行くのを明久は見た。
それで会っていたのは霧島さんだった。

「おれは翔子にこういった」

『試験召喚戦争に応じてくれれば如月グランドパークにもう一度行ってもいい』

「そうしたら一発でOKしてくれたぞ」
「よく決心がついたね」

以前雄二と翔子が如月グランドパークに行ったときは何やら疲れたと度々ぼやいておりもう2度と行きたくないと言っていた。

「ま、仕方がないだろ。仕方がないだろ・・・」

その時、Fクラスを横切る一人の影が見えた。
もしかしてAクラスのスパイに聞かれたかもしれない。

「ということで今の明久なら大丈夫だろ。行って来い」
「ってちょっと待ってよ！本当にこの姿なら大丈夫なの？」
「大丈夫だ。俺が責任持つ」
「雄二・・・わかったよ」

激励されて気分がよくなったのか明久は女装のままでFクラスを出て行った。

数分後

「行ってきたよ・・・」
怪我はないがなにやら落ち込んだ様子で教室内に入っていく明久。
「自分がいま女装していることをすっかり忘れててさ」
「本当に馬鹿だなお前は」
「宣戦布告したけど何もされなかったよ」
「そりゃあ何もしないだろうよ」
「霧島さんも含めてみんな無表情で僕のことを見てるんだよ」
Aクラスに期末休み最終日の午後に開戦予定だと告げに行ったのだがその時なぜか全員が終始無表情で「うん」「分かった」「じゃあな」の3単語しか言わなかった。
不気味にも感じたがなにもされないうちにそのまま教室を後にした明久。
「いいだろう。じゃあお前ら！1週間後の試験に向けて頑張るぞ！」
「「「「「「「オー！！！」」」」」」」
～回想終了～
あの時は自分のことを見て唖然として答えることもできなかったのかそれとも・・・なぜAクラスの人たちが無表情で見ていたのか今もわからない。
「まさかAクラスの奴らが全員偽者だなんて・・・そんなことあるわけないよね」

手が少しだけ震えたがそんことないと自分に思い込ませる。
早くしないと遅刻してしまうので学校まで明久は走って行った。

～1週間前のあの時、明久が出て行った後のＡクラスではある短い会話があった～

「あのバカは行ったか？」
「ええ、私達の会話があいつに聞こえることはないわ」
「聞こえてたとしてもバカがどうこうできる問題ではない」
「それもそうね」
「しかし、なぜ霧島さんは試験召喚戦争に応じたのですか」
「おそらくＦクラスを全員あそこに集めるため、そしてここにいない本物のＡクラスメンバーもふくめて」
「試験召喚戦争・・・そんなのは口実」
「あと少し、あと少し、7月の１０日が楽しみだ・・・」

7月5日　試験1日目

今日の科目は現代国語、数学、化学、保健体育。
朝の教室ではムッツリーニが保健体育の教科書をものすごい勢いで読み漁っていた。
もしかしたらこのままだと７００点ぐらい行くんじゃないかと明久は思う。
美波は数学を思いっきりノートに勉強している。
数学の今回の試験範囲は「対数方程式・不等式」とその応用について。
ノートには明久が全く理解できないような内容がところどころに書いてあった。

「僕は何をすればいいんだ・・・」
「お前は何もしなくていい。邪魔なだけ」
肩をポンとたたきにこやかな笑顔で明久を見下ろす雄二。
「邪魔って」
「冗談だって。ていうか明久は今日なんか自信のある科目あるのか？」
「今日はなにもない」
「まっ、頑張れよ」
「ハハハハ・・・」
苦笑いを浮かべていると扉がバンと開き西村教諭が入ってくる。
「これから1学期期末試験を始める。筆記用具だけを出せ。カンニングは許さんぞ」
明久は小さい脳みそで叩き込んだ情報量を忘れないようにする。
「それでは試験開始！」
現在時刻：０８時３０分　１時限目：数学（制限時間５０分）
問１　次の対数を解け２ｌｏｇ［１／２］？＜ｌｏｇ［１／２］（？＋６）
正答　０＜ｘ＜３
明久　ｌｏｇ　ｌｏｇ
問題のｌｏｇをつなげただけの回答に教師も唖然としただろう。
２日目もそんなこんなで済んでいきついに最終日になった。

７月７日　試験最終日

最終日の科目は日本史、世界史、現代社会とオール社会軍団。
明久は実は１週間前からこの社会を重点的に勉強してきたので少しばかり自信があった。
もしかしたらＢクラス並みの成績が取れるかもしれない。
瑞希の家で勉強した時も社会ばかり勉強していたのがみんなの目に留まった。

「姫路さんの家・・・あの時のメロン」

ビクッとなり立ち上がる明久。もしもあの時見たのが本当にそうだとしたら・・・

「今日は期末試験最終日だ。気を引き締めてやれよ！試験開始！」

西村教諭の言葉で我に戻る。

「最後は頑張らないと」

現在時刻：０８時３０分　１時限目：日本史（制限時間５０分）
問１　織田信長が明智光秀に討たれた本能寺の変の年号を答えよ
正答　１５８２年
明久　イチゴパンツ
年号ではなく覚え方を書いてしまった明久。それはおそらく答案返却まで分からないだろう。

そしてついに終わった。
３日間にわたる史上最低の３日間が終わった。
試験召喚戦争までの２日間は最高の休日。

今までできなかったゲームでもして楽しもうといろいろ練っていると。

「アキ・・・その・・・明日遊びに行かない？」

「えっ？いいよ」

「なんじゃ、なんじゃ？明久に島田よ」

「遊びに行く約束か？」

「・・・じゃあ俺たちも行く」

「それは・・・アキは大丈夫なの？」

「僕は大丈夫だよ。明日は新作ゲームの発売日だしつい最近できたサトーココノカドーにでも行こう」

「分かったわよ。瑞希はいかないの？（せっかくアキと二人っきりではぁ）」

隣で帰りの準備をしている瑞希に美波が聞く。

「すいませんが明日は私の用事がありますので。じゃあまた明々後日」

そのまま教室を一人であとにする瑞希。

「俺たちも帰ろうぜ。昨日は徹夜で眠いんだよ」

「そうね、帰りましょう」

「うん。わし達も帰るとしよう」

「僕も眠いから帰ったらゲームしてすぐ寝よう」

5人で雑談しながら学校を出てそれぞれの家路についていく。

（明日はうまいこと言ってアキと二人っきりになれるチャンスをウフフフ）

美波の顔は明日に向けてにっこりと笑顔になった。

瑞希は学校の屋上で5人が雑談するのをじっと見つめている。
その表情は無表情で時々見せる口だけの微笑みが不気味でもある。

「明日はサトーココノカドーですか。わざわざ教えてくれるだなんて島田さんもお人よしですよね。本当の絶望は希望の中にこそある・・・そうですよね」

ニヤリと笑い後ろを向く。
その先には無表情で立ちすくむ一人の少年。

「明久君」

第１０話　「史上最低最高の４日間」（後書き）

ネタが上がったので２日連続で小説を更新しました。
皆さんに怖く面白いと思っていただければ幸いです。

毎度のことで申し訳ありませんが、ご感想よろしくお願いいたします。

第１１話　「接触」（前書き）

人は天国に行くとか、地獄に堕ちるとか言います。
もしそれが本当だとしたら、今生きているのはそのどちらにも行けないからなのかもしれません。
しかしそれは果たして人間だけのものなのでしょうか？

第１１話　「接触」

７月７日　現在時刻：１７時２４分

試験最終日の夕方。
ほとんどの生徒が帰って試験の疲れを取るために家で睡眠をとったり友人と街中へと遊びに行ったりしている。
ある程度、人通りの多い街角などに行くとほぼ１００％の確率で同じ学年の人物と会う。
ゲームセンターなどによくたむろっている連中も今日に限っては他の奴とも遊ぶ。
だがそんな中でも一部の勉強好きな人、ここ文月学園ならばＡクラスの人物が妥当なところだが、その人たちは図書室などで試験の復習や自己採点などに精を出している。
どこからそんな力が出るのか知らないがともかくそういう人たちが夕方近くまで図書室にいるのだ。

夕方近く、やっと遅い昼食をとったＢクラスの男、根本恭二は携帯電話を取り出してダイアルしてみる。
彼は今文月学園まで徒歩５分のところにいるのだが約束の人物が来ないと４時からずっと待ち続けているのだ。

『おかけになった電話は、電波の届かないところにおられるか、電源が入っていないためかかりません』

昼過ぎから同じ案内を何度耳にしたことだろう。
リダイアルボタンを押してもう一度呼び出し音を押そうと試みた根本だったが、動かした指を止めた。
携帯の画面にメール受信の知らせが入ったのだ。

「メールだもしかして友香からかもしれない」
淡い期待を寄せて携帯のメール画面を見た根本は、驚愕の表情をしてしまった。

【ｆｒｏｍ　小山友香】
『学校にいる　たすけて』

メール画面にはただそれだけが書かれてあった。
根本の手が震えている、ちょっと力を弱めたらすぐさま地面に携帯電話を落としてしまいそうだ。
夕日が自分の背中を照らして後ろの木からはカラスが数匹鳴きながら飛び去った。

「なんなんだよ・・・これは・・・」

確かに相手は待ち合わせをしている小山友香でうれしかった。
でもその喜びを完璧に打ち砕いてしまったのがこのメール。
もしかしたら冗談かもしれないが、まじめな友香に限ってそのようなことを言うはずもなくそれよりも内容からしてシャレでは済まない。

「まずは学校に行かないと」

携帯をポケットの中にしまうと根本は全力疾走で走った。
普段は勉強ばかりして運動などはあまりしないのだが今回に限っては普段の何倍も速く走っているような気がする。
結果として徒歩5分のところを2分足らずで学校に到着した。

「はぁ、はぁ、はぁ、ついた。まだ最終下校時刻まで5分近くあるからな。学校には入れるだろう」

校庭の門をくぐり校舎内に入っていく根本。
試験最終日で校内にまだ復習している生徒が残っていると思いきや奇妙な位に誰もいない。

「廊下も真っ暗だな」

先ほどの人を馬鹿にしたような留守番電話サービスの音声コールが急に腹立たしくなってくる。
自分は今、携帯の電波も届かない場所どころか、生きた人間とは言葉を交わすことのできない世界に足を踏み込んでしまったような気がした。

「友香は今、一体どこにいるんだよ」

学校にいるとは書いてあったもののどの教室にいるとは書いていなかった。

「これってすべての教室を一つ一つ探しながらじゃないとならないのか」

階段を上っていく根本の表情に心配と絶望を半分にしたような色が浮かぶ。
各教室や廊下の隅々を丹念に捜し歩いてみたものの、人の気配すら感じられない。

（ここは本当に文月学園か？）

「ていうか友香は本当に校舎内にいるのか？」

このまま見つけることができなかったら友香に押し切られたような感じがして、根本はやるせないような思いがする。

もしかすると友香はすでにどこかで根本のことをじっと見て、必死で探している自分のことを廊下の隅から嘲笑っているのかもしれない。

「そんなこと、そんなこと、友香に限ってそんなこと・・・あるかも」

ついに最上階についてしまった。

そこにあるのは3年生の教室と奥に保健室があるのみ。

他の回のように美術室や図書室、音楽室などがあるのではない。

「流石に保健室なんかにはいないだろ・・・って、ん？」

保健室の部屋の明かりがかすかについている。

扉も少しだけ空いているしこの部屋のみ、人の気配が十分に感じられるところだった。

「あそこにいなかったら帰ろう。外も暗くなってきたし」

根本は保健室へと歩いていき扉の隙間からそっと中を覗き込む。

文月学園の保健室は一般的な学校よりはるかに広く設計されている。

試験召喚戦争などでけがをしてしまう生徒がいるための考慮であるが実際本当に満員になってしまう日がある。

一人の女生徒が後ろ向きで中央に立っている。

（あの後ろ姿はもしかして友香？何してるんだ？）

何か縛られているわけでもなく『たすけて』などというほどではないように見える。

友香は誰もいない保健室で、うつむきながら一点をじっと見つめている。

何か深く思いつめているのか後ろ居る根本に気付いてはいない。

友香を見つけたらすぐに声をかけるつもりだったがなぜかうまく声をかけることができず戸惑い続けていた。

しかしそれよりも早くメールのことを確認しないと近づいて声をかけようとしたその時。

「来たんなら声かけろよ」

いきなりのきつい言葉に根本は一瞬ひるんでしまう。

根本に背を向けたままの友香の声はとても力がこもって、いつもとはまるでかけ離れていた。

顔が見えないだけにその真意がわからず根本はどう受け答えしていいか戸惑ってしまった。

「いや、ほら・・・お前がメールくれたから。ていうかこんなところで何やってるんだよ」

心配してやってきたのに冷淡した態度をとる友香に対して声を荒げてしまう。

すると友香はゆっくりと振り向く。

振り向いたその顔はいつもと違い、柔らかな笑みが浮かべている。
同級生はもとより先生の前でさえ愛想笑いしない、鬼友香の美しい笑顔であった。

「ねえ？私って嫌われ者なの」

笑顔は一瞬のうちに消えてまた冷淡な顔が生まれる。

「そんなことねえよ」
「嘘、いつも聞こえる。クラスメイトの陰口、陰口、陰口。表向きは仲間を装っても私の居場所なんてどこにもない」
「だから！お前に限ってそんなことあるわけないだろ」
「あなたは何もわかってないのね。まっ、そうでしょ。自分のこともわかってないのに人のことなんか分かるわけが」
「それはどういうことだよ」
「あなたも言われているのよ。ほらBクラスはなにかとまとまりがないじゃない。それはあなたに問題があるのよ」
「どうしたんだよ友香。いつものお前じゃないぞ」

「フフフ・・・フフフフフ・・・ハハハハハ！！！」

いきなり腹を抱えて笑い出す友香に根本は恐怖を覚える。
一刻も早くここから立ち去りたいが足が言う事を聞かない。

戸惑ったまま黙って立ちすくす根本の前で友香は笑いながら友香は隣にある廃棄分注射器の束が入っているポリバケツのふたを開ける。
廃棄用の大きな箱に放られた医療注射は、誰も二度と手に取ることはしない。
それは6月下旬に学年全体の予防注射で使ったものだ。

「そ、そんな注射なんか持って危ないじゃないか！」
「あたしが保健委員会なのは知ってるでしょ。器具が足りないのよ、節約してもらわないと・・・ほら、まだこんなに使えるじゃない」
恐怖のあまり根本は震え、手汗も凄い。
だがまずは友香を正気に戻さないとこのままではとんでもないことになる。
「何でもかんでもみんなすぐに捨てちゃうんだから。私の存在も」
根本を見て微笑んだ目が、異様に光る。
「もうこの学校のほとんどは私たちと同じになっているはず」
「同じってどういうことだ？」
「もう手遅れよ。学校だけじゃない、あなたたちはこの町から出ることはできない。明後日にはすべてが終わる」
「明後日って」
「まっ、その前にここに呼び出したあなたが先なのよ」
手に持った注射を思いっきり振り落とそうとする。
「やめろ！！」
根本の制止も聞かずに腕に針を突き刺す。
そこは静脈でも血管でもない部分で、その表情は鬼気迫るものだ。
「さようなら！根本君！」
片腕に持ったもう一本の注射を首元に刺したその瞬間、友香の口か

ら緑の液体が流れ落ちる。

「ゆ、友香あああああ！」

恐怖よりもまず友香のもとに駆け寄る。

友香の口からはなおも緑の液体が流れ続ける。

注射の跡がある首元には何やらマークのようなついているが根本がそれに気付くことはない。

「なんなんだよ、なんなんだよこれは！」

その時自分の斜め後ろにあるベッドのシーツが不気味な音を立てて動く。

人型に覆われたシーツが起き上がるとベッドから降りて少しずつ、少しずつ、顔がはっきりしていく。

その姿は言うまでもない根本恭二そっくりであった。

鋭い目を光らせじっと見つめることに本物の根元は恋人の目の前の衝撃でまだ気づいていない。

こいつはずっとこの部屋にいたのだ。

二人の会話もずっと聞いていた。

一部始終を見られたとも知らず、保健室の床に座り込んでいる根元の背後にそっと足音も立てずに忍び寄る。

そして真後ろにたたれた時ついに根本はその姿に気付く。

誰もいない暗闇の廊下。
根本恭二という男の悲鳴がそこに響き渡ったがそれは誰にも聞かれることはなかった・・・

７月７日　現在時刻：１９時３４分
島田美波の自宅では明日行くショッピングモール、サトーココノカドーに行く準備をしていた。
先日は試験召喚戦争もとい期末試験のために午前３時まで勉強していたので帰るなりすぐベッドに寝てしまったのだ。
帰るまでは明日のための服を買おうと思っていたのに家につけばすぐ眠くなってしまった。
３時間だけと思ったものの起きた時にはすでに夜の７時になっているという惨事。

「なんで起きなかったのよ私！明日のための洋服を買いに行けなかったじゃない」

と小騒ぎしてみたもののそれで時間が戻るわけではない。
夕食を食べるとすぐ部屋に戻り今、ある分のみで服を決めようと思う。

「瑞希はなぜか明日来ないみたいだしもしかしてデート・・・いや違う」

瑞希は来ないもののその他のいつものメンバーである雄二、秀吉、ムッツリーニ。
おそらく明久と二人きりになれる時間は皆無に等しいだろう。

「じゃあ今更、服を決めてもしょうがないよね」
でも万が一の時のために女の子らしい服装を準備しようと以前買った洋服を選ぶ。
自分なりにかなり可愛い服装だと思う。
「これでいいよね。明日は偽者なんかのこと忘れられそう」
ここ数日間偽者のことでロクに安心して生活することができなかった美波。
でも明日はそんなことすべて忘れて遊ぶことができそうだ。
「偽者なんか本当はいないのに・・・早くこんな噂、消えればいいのに」

同時刻

スーツ姿の一人の男が誰もいなくなった文月学園の保健室に立っている。
ただ一つ床には大量に落ちている緑色の溶液。
服も半分は溶けているが恰好からして女子生徒の者だとわかる。
ここに残されたすべての組織溶液を集めればおそらく高校生一人分の体積にはなるだろう。
「日本に来てここに初めてやってきた。だが最初に見つけたのがこれか・・・溶けたとなるとこれはやはり」
おびただしい量の緑の液体は少しずつでも広がっている。
おそらく皮膚の壊疽が進み筋肉組織が溶け流れ落ちてしまった。

「この学校に残っている本物はあと何人残っているのか・・・とにかく急がないと大変なことになる」

男はそのまま保健室を後にする。

誰も入れないように完全封鎖して。

ジェームス・テイラー・・・その男の瞳は誰にも揺るがない決心に燃えていた。

第１１話　「接触」（後書き）

今回はレギュラーキャラクターではない根本恭二＆ａｍｐ；小山友香を登場させてみました。
アニメ・原作ともに卑劣な役として登場している二人ですがこの小説ではまだ破局していない設定でいます。
これからどうなるかはしりませんが一番のホラー展開となったと私は思います。
明久の出番が少ないじゃないかと思いますが都合上申し訳ありません。
ご感想よろしくお願いいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6130y/

バカとテストと恐怖のクローン召喚獣

2012年1月15日01時45分発行